

三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』の和訳

——三性説と般若経の経文との関係性——

飛 田 康 裕

1. 『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』(*Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgrahavivaraṇa-)について

小稿においては、5 世紀後葉から 6 世紀中葉の人物と伝えられる¹三宝尊 (dkon mchog gsum gyi 'bangs, *Triratnadāsa-) の手に成る『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』('phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin ma bsdu pa'i tshig le'ur byas pa'i rnam par 'grel pa, *Āryaprajñāpāramitāpiṇḍārthasamgrahavivaraṇa-, PrPPSV) の和訳を試みる。この『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』においては、その前半で「十六空」が解説され、後半で「十種分別散乱」(*vikalpavikṣepa-) が解説されるが、ここにおいて特に取り上げるのは、後半の十種分別散乱の解説である。

この三宝尊の論書については、サンスクリット語の原文は既に散佚し、現在では、北宋の施護などによる漢訳、ならびに、ティラカカラシャ (Thig le bum pa, *Tilakakalāśa-) とローデンシェーラブ (Blo ldan shes rab) によるチベット語訳が存在するのみである。なお、このうちの漢訳については、綴文や潤文が不十分で、その内容を正確に読解することが困難である²。このため、和訳に際しては、専ら、チベット語訳に基づき、漢訳は参考までに括弧に入れて和訳に添えるにとどめた。

この『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』という著作は、やはり、5 世紀後葉から 6 世紀中葉の人物と推測される陳那 (phyogs kyi glang po, *Dignāga-) に帰される『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha-, PrPPS) ³ に対して三宝尊が施した註釈である。なお、この陳那の著作については、今もなお、サンスクリット語の原文が保存されている⁴。

ここで、三宝尊の注釈のうち、十種分別散乱の解説にあたる部分について確認してみると、概要は以下ようになる（なお、十種の「分別散乱」については、施護による漢訳の術語を用い、括弧内には、より一般的と思われる『大乘莊嚴經論』の漢訳の術語を添えた）。

¹ 三宝尊、および、その『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』における注意点については、拙稿 [2020; § 1.2] 参照。

² チベット語訳を参照しながら、この難解な漢訳を訓読した労作に、大竹 [2009] がある。

³ 陳那『仏母般若波羅蜜多円集要義論』の和訳とその構成については、服部 [1961] 参照。

⁴ Dignāga, *sein Werk und seine Entwicklung*, ed. Erich Frauwallner, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.

[0] 十種分別散乱（十種散乱分別）総説	PrPPSV P344a4-/ D301b4-
[1] 無相分別散乱（無体分別）	PrPPSV P345a7-/ D302b5-
[2-1] 有相分別散乱（有体分別）	PrPPSV P346b3-/ D303b5-
[2-2] 三性説	
[2-2-0] 三性説総説	PrPPSV P347b8-/ D304b6-
[2-2-1] 遍計所執性	PrPPSV P348a7-/ D305a4-
[2-2-2] 依他起性	PrPPSV P348b3-/ D305a7-
[2-2-3] 円成実性	PrPPSV P348b6-/ D305b3-
[2-2-4] 三性説と般若經の經文との関係性	PrPPSV P349b2-/ D306a4-
[3] 俱相分別散乱（増益分別）	PrPPSV P351a4-/ D307b1-
[4-1] 毀謗分別散乱（損減分別）	PrPPSV P351b2-/ D307b6-
[4-2] 如来蔵	PrPPSV P351b6-/ D308a2-
[5] 一性分別散乱（一相分別）	PrPPSV P353b3-/ D309b2-
[6] 種種分別散乱（異相分別）	PrPPSV P354a3-/ D309b7-
・ 論証因（1）	PrPPSV P355a4-/ D310b7-
・ 論証因（2）：自己認識に関する議論	PrPPSV P355a7-/ D311a1-
・ 論証因（3）	PrPPSV P357a3-/ D312a5-
[7] 自性分別散乱（自相散乱分別）	PrPPSV P357a8-/ D312b1-
[8] 差別分別散乱（別相散乱分別）	PrPPSV P358a2-/ D312b7-
[9] 如名於義分別散乱（如名起義分別）	PrPPSV P358a6-/ D313a3-
[10] 如義於名分別散乱（如義起名分別）	PrPPSV P359a8-/ D313b7-

以上のうち、十種分別散乱総説（[0]）、無相分別散乱（*abhāvavikalpavikṣepa-）の解説（[1]）、そして、有相分別散乱（*bhāvavikalpavikṣepa-）の解説（[2-1]）については、拙稿 [2020] において既に和訳を示した。また、無相分別散乱・有相分別散乱の関連で説かれる三性説（[2-2]）のうち、三性説総説（[2-2-0]）、遍計所執性（*parikalpitasvabhāva-）の解説（[2-2-1]）、依他起性（*paratantrasvabhāva-）の解説（[2-2-2]）、そして、円成実性（*pariṇiṣpannasvabhāva-）の解説（[2-2-3]）についても、拙稿

〔2022〕において既に和訳を示してある⁵。よって、小稿においては、その続きとして、以上の三性説の総括と、それらが『八千頌般若波羅蜜多經』の中で、具体的にはどのように説かれているかを示す「三性説と般若經の經文との関係性」(〔2-2-2-4〕)の和訳に着手する。

この箇所(〔2-2-2-4〕)の和訳に臨むにあたって、ここまでの論の流れを簡単に振り返ると、以下のようになる。

まず、三宝尊の解説によれば、「〔1〕無相分別散乱(無体分別)」と「〔2-1〕有相分別散乱(有体分別)」とは、それぞれ、「存在するものを存在しないというかたちで誤って構想するもの⁶・「(真実として)存在しないものを(個別のあり方を有して)存在すると[いうかたちで]錯誤するもの⁷」と理解される。この無相分別と有相分別については、世親などの論書を閲すると、伝統的には、個人原理(*ātman-)を論題としていて、如何なる個人原理は認められ⁸、如何なる個人原理は認められない⁹かという問題を扱うものであったことが知られる。この際の世親の見解は明確で、空性(*śūnyatā-)

⁵ 拙稿〔2022〕において割愛した該当箇所のチベット語訳校訂テキストについては、小稿文末に収載した。

⁶ 拙稿〔2020; p. (55), l. 21-p. (57), l. 17〕参照。

⁷ 拙稿〔2020; p. (66), l. 17-p. (68), l. 27〕参照。

⁸ Cf. MSAVy 76, 8f.: [1] abhāvavikalpo yasya pratipakṣeṇāha — prajñāpāramitāyāṃ iha bodhisattvo bodhisattva eva sann iti (〔1〕無相分別(無体分別)が〔説かれたが、〕こ〔の分別〕に対抗するもの(pratipakṣa-)として『般若波羅蜜多經』では〔以下のことが〕説かれている——「〔シャーリプットラ(*śāriputra-)よ。〕菩薩(bodhisattva-)が、この〔完成した智慧を発現させるための修行(*prajñāpāramitā-)の〕中で〔実践すべきことを実践しているときに〕も、〔その菩薩は〕まさしく菩薩として存在しているが」〔云々〕と)。この經文を解釈して、世親は以下のように言う。MSBh P178a3/ D149a6: byang chub sems dpa' nyid yod bzhin du zhes bya ba ste/ yod ces smos pas ni byang chub sems dpa' stong pa nyid kyi bdag nyid du yod pa'o// (「菩薩は、この完成した智慧を発現させるための修行の中で、実践すべきことを実践しているときも、〕まさしく菩薩として存在しているが」と。『般若波羅蜜多經』は、〕「存在している」と言って、菩薩が、空性という個人原理(stong pa nyid kyi bdag, *śūnyatāman-)を有して存在する〔ことを示しているのである〕)。

⁹ Cf. MSAVy 76, 9f.: [2] bhāvavikalpo yasya pratipakṣeṇāha — bodhisattvaṃ na samanupaśyatyevamādi (〔2〕有相分別(有体分別)が〔説かれたが、〕こ〔の分別〕に対抗するもの(pratipakṣa-)として『般若波羅蜜多經』では以下のことが〕説かれている——「〔その菩薩は、〕菩薩を見ない」云々と)。この經文を解釈して、世親は以下のように言う。MSBh P178a5f/ D149a7f.: [2] byang chub sems dpa' yang dag par rjes su mi mthong ngo ^[D149b1] zhes bya ba ste/ kun tu brtags pa dang/ gzhan gyi dbang gi ^[P178a6] bdag nyid can gyi yang dag par rjes su mi mthong ngo ^(ngo D; ngo// P) zhes bya bar dgongs so// (〔2〕「〔その菩薩は、〕菩薩を見ない」と。〔ここでは、菩薩は、〕遍計所執(kun tu brtags pa, *parikalpita-, 完全に〔誤って〕構想されたもの)と依他起(gzhan gyi dbang, *paratantra-, 他に依存するもの)を個人原理(bdag nyid, *ātman-)とする〔菩薩〕を見ない、ということが意図されている.....)。

すなわち円成実(*pariṇiṣpanna-)を個人原理とすることは認めるが、遍計所執(*parikalpita-)と依他起(*paratantra-)とを個人原理とすることは認めないというものである¹⁰。ところが、陳那と三宝尊は、この無相分別と有相分別とを初学の菩薩の修習の一つとしても位置付けため¹¹、何をもって存在すると見なすかの基準が度外視されて、両分別の指し示す範囲が茫洋となった嫌いがある。すなわち、陳那と三宝尊によっては、ウパニシャッドにおけるアートマンは言うに及ばず、世俗の五蘊からはじまって果ては無二智にいたるまでの全てを否定する虚無論者の見解も無相分別(A)¹²なら、説一切有部などが主張する勝義の五蘊を否定する見解もまた無相分別(B)¹³と見なされ、他方、世俗の五蘊を肯定する見解も有相分別(A)¹⁴なら、勝義の五蘊を肯定する説一切有部などの見解もまた有相分別(B)¹⁵と見なされるのである¹⁶。しかし、有相分別を説明する際に、如何なる仕方によっても否定されずに残るものが辛うじて示される¹⁷。陳那によっては、それが「無二智」であることが仄めかされ、三宝尊によっては、それが「清淨智」——三宝尊の意図としては、自己認識(それ自身を認識している智)が「清淨智」として想定されている——であることが明言される¹⁸。

このようにして、「無二智」ないし「清淨智」が否定されずに残ることが示されたところで、次に、否定されないものと否定されるものの関係性や成り立ちの仕組みを示す三性説が解説されることになる。ここで言われる「三性」とは、三つの存在を表し、具に言えば、「[誤って]構想されているもの」(遍計所執,*parikalpita-)・「他に依存するもの」(依他起,*paratantra-)と言われる独自の存在(性,*svabhāva-)と「完成したもの」(円成実,*pariṇiṣpanna-)と言われる独立する存在(性,*svabhāva-)を指す。

ところで、今、否定されないものとして「無二智」ないし「清淨智」が示されると述べたが、伝統的な見解と比較すると、ここに重大な更新のあることが知られる。すなわち、否定されないものと

¹⁰ 註8・註9参照。

¹¹ 拙稿 [2020; p. (54), l. 14-p. (55), l. 1] [2020; p. (57), l. 18-p. (58), l. 2] 参照。

¹² 拙稿 [2020; p. (55), l. 3-p. (62), l. 36] 参照。

¹³ 拙稿 [2020; p. (53), l. 26-p. (54), l. 6] [2020; p. (66), l. 4-p. (71), l. 15] [2022; 註13] 参照。

¹⁴ 拙稿 [2020; p. (53), l. 26-p. (54), l. 6] [2020; p. (66), l. 4-p. (71), l. 15] [2022; 註13] 参照。

¹⁵ 拙稿 [2020; p. (66), l. 4-p. (71), l. 15] 参照。

¹⁶ 陳那と三宝尊によると、以上の分別のうち、全てを否定する虚無論者の見解(無相分別A)は、世俗の五蘊を肯定する見解(有相分別A)によって抑止され、勝義の五蘊を肯定する説一切有部などの見解(有相分別B)は、勝義の五蘊を否定する見解(無相分別B)によって抑止されることになる。拙稿 [2020; p. (53), l. 26-p. (54), l. 6] [2022; 註13] 参照。

¹⁷ 拙稿 [2020; p. (71), l. 16-p. (75), l. 1] 参照。

¹⁸ 拙稿 [2020; p. (58), l. 6-p. (66), l. 2] 参照。

して、世親などの伝統説においては、「空性」というあり方が示されてきたのに対して、陳那と三宝尊の説においては、「智」という事物が示されることになるのである¹⁹。なお、このような説き方の更新は、「世俗の共相（世俗の智によって知られる、一切の事物に共通するあり方）は、実は、勝義の自相（最高の智によって知られる、事物そのもの）にほかならない」という教えを思想的な背景にして行われたと推測される²⁰が、あり方のほうではなく、事物のほうを以てしてこれを説くという態度は、陳那と三宝尊との真骨頂であると言える。ただし、このことは他言が憚られる事柄であつたと見えて、陳那は巧みに明言を避けており、この態度が鮮明に打ち出されるようになるのは三宝尊にいたってからである。

かくして、否定されずに残るものとして、「空性」というあり方ではなく、「智」という事物が打ち立てられたことにより、三性説の説き方にも変化が生ずる。

伝統的な三性説においては、否定されないものが「空性」というあり方であるため、これを基盤に据えて存在論を展開することが困難である。そこで、虚妄分別（abhūtaparikalpa-, 虚妄なものを分別するもの）という事物を依他起性として、これを基盤に据える。そして、この虚妄分別を手段あるいは拠り所として誤って構想されたものを遍計所執性とし、さらに、虚妄分別という事物に属する「空性」というあり方を円成実性とすることによって、三性が説明される。²¹

これに対して、三宝尊の三性説においては、否定されないものが「智」という事物であるため、これを基盤に据えて存在論を展開することが容易である。そこで、まず、「無二智」(*advayañāna-)——所取（把握される対象）・能取（把握する認識）という形相を離れた知覚——を円成実性とし、次に、この「無二智」の上に現れる所取・能取の顕現を依他起性とし、最後に、この所取・能取の顕現に対して付託される言葉や概念を遍計所執性とするというかたちで、三性が説明されることになる。²²

¹⁹ 拙稿 [2022; 註 27] 参照。

²⁰ 拙稿 [2017; § 3] 参照。

²¹ Cf. MAVBh 17, 16-18, 3: *abhūtaparikalpo 'sti dvayaṃ tatra na vidyate/ śūnyatā vidyate tv atra/ [I. 1] tatrabhūtaparikalpo grāhyagrāhākavikalpaḥ. dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ ca. śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhākabhāvena virahitā*（虚妄分別（abhūtaparikalpa-, 虚妄なものを〔誤って〕構想しているもの）は存在する。そこ（虚妄分別）には二つのもの（dvaya-）は存在しない。しかし、そこ（虚妄分別）には空性（śūnyatā-, [二つのもののあり方を] 欠いているというあり方）が存在する……。[I. 1] ここにおける虚妄分別とは、所取（grāhya-, 把握されるもの）と能取（grāhaka-, 把握するもの）とを〔概念的に〕構想しているもの（vikalpa-）である。二つのものとは、所取と能取とである。空性とは、その虚妄分別が所取と能取というあり方を欠いていることである）。拙稿 [2019] 参照。

²² 拙稿 [2019] [2022; § 2] 参照。

(98)

以上のように、遍計所執性・依他起性・円成実性という三性が規定されたところで、さらに、陳那は、一般的に言って、数多ある『般若波羅蜜多經』群において如何なる文言が三性の表徴となっているかということを説明する。すなわち、三性と『般若波羅蜜多經』との**一般的**関係性の説明である。なお、この説明は、『大乘阿毘達磨經』(Abhidharmasūtra-)の偈文に則って行われている。²³

陳那によれば、『般若波羅蜜多經』における三性の表徴は、一般的には、以下のようにして知られるという——まず、『般若波羅蜜多經』における「存在しない」などという否定的言明は、すべて、遍計所執性を否定するためにある。よって、否定文は、遍計所執性の表徴である²⁴。次に、『般若波羅蜜多經』における「幻」などという喩例は、すべて、依他起性を説くためにある。よって、「幻」などの喩例は、依他起性の表徴であると²⁵。そして、円成実性の表徴は、四清淨法（四種の明淨なるもの）である²⁶、と。

このうちの「四清淨法」については、三宝尊の註釈より、以下に示す4種の事物が意図されていることが知られる。すなわち、[1]「本来的に清らかなもの」(自性清淨)、[2]「穢れから離れることにより清らかなもの」(離垢清淨)、[3]「[修行の] 拠り所という清らかなもの」(所縁清淨)、そして、[4]「[法界から] 生じ [法界と] 同じ性質を有する [結果] という清らかなもの」(平等清淨)と呼ばれる4種の事物である²⁷。

このようにして、三性と『般若波羅蜜多經』との**一般的**な関係性が説明されたところで、さらに、陳那は、これらを総括し、その流れの中で、以上の三性が、殊に『八千頌般若波羅蜜多經』の中で、**具体的**には如何に説かれているかを示す。この箇所が、小稿で取り上げる「三性説と般若經の經文との関係性」([2-2-2-4])の部分である。

以下、その和訳に際しては、まず、陳那の『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(PrPPS)のサンスクリット語原文・チベット語訳・サンスクリット語原文和訳を順に掲げ、次に、三宝尊の註釈のチベット語訳(PrPPSV)・チベット語訳からの和訳を掲げることとした。対応する漢訳の箇所情報については、それぞれの和訳の末尾に示してある。なお、和訳に先立ち、必要に応じて、簡素な解説を挿入した部分もある。

²³ 拙稿 [2022; p. (56), l. 7-p. (58), l. 2] 参照。

²⁴ 拙稿 [2022; § 3] 参照。

²⁵ 拙稿 [2022; § 4] 参照。

²⁶ 拙稿 [2022; § 5] 参照。

²⁷ 拙稿 [2022; § 5] 参照。

2. [2-2-4] 三性説と般若經の經文との関係性

さて、以上のようにして、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)・「他に依存するもの」(依他起性)・「完成したもの」(円成実性)と呼ばれる「三つの存在」(三性)と『般若波羅蜜多經』の經文との一般的関係性を説明したところで、陳那は、これを総括するかたちで、『般若波羅蜜多經』の經文は、すべて、「三つの存在」(三性)を説示するためにあると主張する。以下がその主張を表す偈文である。

PrPPS v. 29cd:

prajñāpāramitāyāṃ hi nānyā buddhasya deśanā// [29cd]

G414a2/ P334b3f./ N335a7/ D293b5f./ C300a6f.:

[G414a2] shes rab pha [C300a7] rol [P334b4] phyin par ni//

sangs rgyas kyis ni gzhan [D293b6] bstan med//

実に、『般若波羅蜜多〔經〕』には、仏陀による〔以上の三つの存在とは〕別の説示は〔存在し〕ない。【T25, 913b13】

そして、三宝尊は、この偈文を以下のように逐語的に註釈する。

PrPPSV G432a1ff./ P349b2ff./ N350b5ff./ D306a4f./ C313a4f.:

de ltar mjug bsdu pa'i tshul gyis (mjug bsdu pa'i tshul gyis PNDC; 'jug bsdu pa'i tshul gyis G) sbyar bar byas nas (sbyar bar byas nas

GNDC; sbyar bar phyas nas P) [N350b6] mjug bsdu pa [G432a2] nyid (mjug bsdu pa nyid PNDC; 'jug bsdu pa nyid G) byed pa ni/ shes rab

pha rol phyin par ni// (shes rab pha rol phyin par ni// NDC; shes rab pha rol phyin bar ni/ P; shes rab kyi pha rol tu phyin par ni/ G) zhes [D306a5]

bya ba la sogs pa gsungs so// (gsungs so// PDC; gsungso// GN) gang gi phyir (gang gi phyir GNDC; ged gi phyir P) shes rab pha

rol tu phyin par (shes rab pha rol tu phyin par G; shes rab kyi pha rol tu phyin par PNDC) [P349b3] sangs rgyas bcom ldan 'das (bcom

ldan 'das PNDC; bcomdas G) kyis [C313a5] sgra dang don gyi ngo bo nyid (ngo bo nyid DC; ngo bo GPN) bstan pa ji snyed mdzad

pa (mdzad pa GNDC; mdzad ba P) de thams [N350b7] cad (thams cad PNDC; thamd G) nyid ni rang bzhin gsum po 'di [G432a3] kho

nar rtogs par bya (rtogs par bya DC; rtogs par bya GPN) ste/ gzhan gyi dbang la sogs pa'i ngo bo las [P439b4] gzhan du

[D306a6] gyur pa gzhan bstan pa med de/ (med de/ PNDC; mede/ G) gzhan srid pa ni ma yin no// (yin no// DC; yin no PN; yino

G) zhes bya ba ni (zhes bya ba ni GPDC; zhes bya ba'i ni N) bsdu pa'i don (bsdu pa'i don DC; bsdu ba'i don GPN) to//

[そして、] 以上のように、[経中の標語の] 引用 (mjug bsdus pa, *nigamana-) という仕方で、
 [『般若波羅蜜多經』の経文が三つの存在と] 結び付けられて (sbyar bar byas nas)、まさに [そ
 の] 総括 (mjug bsdus pa) を為すものとして——「実に、『般若波羅蜜多 [経]』には」云々とい
 う [偈文が] 説かれるのである。 何となれば、『般若波羅蜜多 [経]』に [おいて]、 仏陀 によ
 り、[すなわち、] 世尊により、[対象を表述する] 語と [語によって表述される] 対象とを本性
 とする (sgra dang don gyi ngo bo nyid, 言義自性, *śabdārthasvabhāva-) 説示 が如何ほど為されてい
 ようとも、そ [の仏陀による説示] は、まさしくすべて、以上の三つの独自の存在 (あるいは、
 独立する存在) (rang bzhin gsum po, 三種相, *trisvabhāva-) [の説示] にほかならないと理解され
 るからである。[つまり、] 他に依存しているものなどという [三つの] 独自の存在 (あるいは、
 独立する存在) (gzhan gyi dbang la sogs pa'i ngo bo, 依他等自性, *paratantrādisvabhāva-) [の説示]
 とは異なっている (gzhan du gyur pa, 離)、別の説示は [存在し] ない、 [すなわち、] 別の [説
示] はありえない (gzhan srid pa ni ma yin pa)、というのが [ここにおける] 要旨である。【T25,
 907b1-5】

この前段において、陳那は、「三つの存在」(三性)と『般若波羅蜜多經』の経文との一般的関係性
 として、否定文が説かれているときには、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)が説かれ
 ていると理解でき、幻などの喩例が説かれているときには、「他に依存するもの」(依他起性)が説か
 れていると理解できると説明していた。なるほど、この陳那の説明は、便宜の上で、一応、受容しう
 るものである。しかるに、「完成したもの」(円成実性)の表徴であるとされる四清淨法 (四種の明淨
 なるもの) は、『般若波羅蜜多經』の中において直接的に説かれることはない。さらにまた、『般若波
 羅蜜多經』の全文が、否定文と幻などの喩例だけによって構成されているわけでもない。それにも
 かかわらず、『般若波羅蜜多經』の経文は、すべて、三つの存在 (三性) を説示するためにある」と
 主張する陳那の心裏には、如何なる意図が隠されているのか。このことを解き明かすために、三宝
 尊は以下のように解説する。

PrPPSV G432a3f./ P349b4f./ N350b7ff./ D306a6f./ C313a6:

[C313a6] 'dir ni gang du sgyu ma lta bu ^[N351a1] la sogs pa'i dpes bstan nas ^[G432a4] bstan pa mdzad pa der gzhan
 gyi dbang kho na bstan gyi gzhan ma yin no (gzhan gyi dbang kho na bstan gyi gzhan ma yin no DC; gzhan gyi gzhan ma yin no PN; gzhan
 gyi gzhan ma yino G) ^[P349b5] zhes bya ba 'di nges pa yin gyi gang du gzhan gyi dbang ^[D306a7] bstan pa der sgyu ma
 lta bu la sogs pa (sgyu ma lta bu la sogs pa DC; sgyu ma la sogs pa GPN) dpe yin no (yin no DC; yin no/ G; yino/ N; yig no/ P) zhes bya ba

'di ni ^[N351a2] nges pa yod pa ma yin no// (nges pa yod pa ma yin no// DC; nges pa ma yin no// P; nges pa ma yino// GN)

そこ（『般若波羅蜜多經』）では、如何なる箇所においてであろうとも、「幻のごとし」などという喩例によって〔教えが〕説かれ、〔仏陀による〕説示がなされる場合には、その箇所においては、ただ他に依存しているもののみが説かれていて、〔他に依存しているものとは〕別のものが〔説かれていることは〕ないということが定まっているが、その一方で、或る箇所において、他に依存しているものが説かれているからと言って、必ずしも、その箇所で、「幻のごとし」などという喩例が〔説かれる〕とは限らない。【T25, 907b5-8】

三宝尊の註釈によれば、以下のように言えよう。『般若波羅蜜多經』において幻などの喩例が説かれているときには、必ず、「他に依存するもの」（依他起性）が説かれているのであるから、少なくとも、その部分は「他に依存するもの」（依他起性）を説示している箇所として誰もが理解できる。しかし、「他に依存するもの」（依他起性）は、幻などの喩例とは別の方法で説かれることもあるので、そのような部分については、読者なり誦者なりが、機に臨んで、『般若波羅蜜多經』の言外の意図を汲み取らなければならないということである。

このことは、「〔誤って〕構想されているもの」（遍計所執性）の説示の場合もまた同様である。これを解説するために、三宝尊は以下のように述べる。

PrPPSV G432a4ff./ P349b5f./ N351a2f./ D306a7f./ C313a7f.:

[C313a7] de bzhin du gzhan du yang ste gang du ^[G432a5] dgag pa'i sgo nas bstan pa mdzad pa (bstan pa mdzad pa DC; bstan pa'i mdzad pa GPN) ^[P349b6] der brtags pa nyid (brtags pa nyid PNDC; btags pa nyid G) bstan pa yin gyi (bstan pa yin gyi DC; bstan gyi GPN) gzhan ma yin no (yin no PDC; yino GN) zhes nges kyi gang du brtags pa ston pa der dgag pa'i sgo kho na [D306b1] nas yin no (yin no PNDC; yino G) zhes bya ^[N351a3] ba'i nges pa 'di ni yod pa ma yin te/ sgrub pa'i sgo nas [G432a6] kyang srid ^[C313b1] pa'i phyir ro// (phyir ro// PDC; phyiro// GN)

別の場合もまた同様であって、如何なる箇所においてであろうとも、否定という方法によって〔仏陀による〕説示がなされる場合には、その箇所においては、ただ〔誤って〕構想されているもののみが説かれていて、〔誤って構想されているものとは〕別のものが〔説かれていることは〕ないということが定まっているが、その一方で、或る箇所において、〔誤って〕構想されているものが説かれているからと言って、必ずしも、その箇所で、否定という方法によって〔教えが説かれる〕とは限らない。〔何となれば、誤って構想されているものは、〕肯定（sgrub pa）という

方法によって「説かれる」可能性もあるからである。【T25, 907b8-11】

以上のごとく、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)についても、『般若波羅蜜多經』において否定文が説かれているときには、少なくとも、その部分に関しては、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)が説示されていると理解しなければならないが、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)は、肯定文で説かれることもあるので、そのような部分については、読者なり誦者なりが、『般若波羅蜜多經』の言外の意図を汲み取らなければならないというのである。

さらに、「完成したもの」(円成実性)の表徴である四清浄法(四種の明浄なるもの)にいたっては、そもそも、『般若波羅蜜多經』の中において直接的に説かれることはない。このことは、三宝尊によっても、勿論、熟知されている。よって、「完成したもの」(円成実性)に関しては、初めから、読者なり誦者なりが、その言外の意図を汲み取らなければならない。三宝尊は、このことを以下のようなかたちで解説する。

PrPPSV G432a6/ P349b7/ N351a3/ D306b1/ C313b1:

[P349b7] grub pa (grub pa GPND; brub pa C) la ni nges pa med pa kho nas ji ltar srid pa bzhin du (ji ltar srid pa bzhin du GNDC; ji ltar srad pa bzhin du P) rnam par 'jog pa yin no// (yin no// PDC; yino// GN)

完成したものについては、[説示に関する] 定型がないので、可能性に応じて (ji ltar srid pa bzhin du, *yathāsaṃbhavam)、[その場にふさわしい説示の方法で、完成したものが] 確立されるのである。【T25, 907b11ff.】

以上の解説をもって、『般若波羅蜜多經』の經文は、すべて、三つの存在(三性)を説示するためにある」との陳那の主張と現実との齟齬は、一応、会通されたこととなる。よって、次には、『般若波羅蜜多經』の經文は、すべて、三つの存在(三性)を説示するためにある」という前提のもとで、三つの存在(三性)が如何にして説示されているかという説示の方法が説明されることになる。

PrPPS v. 30:

daśasaṃkalpavikṣepavipakṣe deśanākrame/
trayāṇām iha boddhavyaṃ samastavyastakīrtanam//30//

G414a2/ P334b4/ N335a7f./ D293b6/ C300a7:

kun rtog g-yeng ba rnam bcu yi//

mi mthun phyogs bstan tshul la ni//

^[N335b1] gsum po bsdus dang so so ba//

'dir brjod par ni shes bya ste//

『般若波羅蜜多經』における三つの存在（三性）の〕説示の方法は、十〔種〕の〔誤った〕思考という〔心を〕散乱させるものに対抗することを目的とするので、ここ（『般若波羅蜜多經』）においては、三〔つの存在〕が、一纏めに、あるいは、別々に説かれていると知られるべきである。【T25, 913b14f.】

先に、陳那においては、『般若波羅蜜多經』の経文は、すべて、三つの存在（三性）を説示するためにある」ということが前提になっていることを述べたが、この経文に関しては、もう一つの重要な前提として、『般若波羅蜜多經』の経文は、すべて、十種の分別散乱に対抗するためにある」という発想がある。というのは、完成した智慧を発現させるための修行は、すべて、十種の分別散乱に対抗するためにあり²⁸、そして、『般若波羅蜜多經』の経文は、その修行を生起させるための拠り所であるからである²⁹。よって、十種の分別散乱のそれぞれの特性に応じて、三つの存在（三性）が、一纏めに説かれることもあれば、一つずつ説かれることも、二つずつとかれることもあるというのが、以上の偈文の意図である。

三宝尊は、この偈文を以下のように逐語的に註釈する。

PrPPSV G432a6-432b3/ P349b7-350a3/ N351a3-6/ D306b1-4/ C313b1ff.:

de la de ltar bstan pa rnam par gnas pa yin na/ brjod pa ni ^[N351a4] 'di yin te/ kun rtog g-yeng ba rnam bcu
^[D306b2] vi// (yi// DC; yi GPN) zhes ^[P349b8] bya ^[G432b1] ba la sogs pa'o// gang du kun tu rtog pa'i (kun tu rtog pa'i GPN; kun
 du rtog pa'i DC) g-yeng ba rnams kvi mi ^[C313b2] mthun phyogs (mi mthun phyogs GPN; mi mthun pa'i phyogs DC) bstan tshul
la ni zhes bya ba 'gal ba'i phyogs ni mi mthun phyogs te ('gal ba'i phyogs ni mi mthun phyogs te DC; 'gal ba'i phyogs te GPN)
 gnyen po zhes bya ba'i don to// (don to// D; don do C; don te/ GPN) bstan ^[N351a5] pa'i tshul de la brtags pa ^[P350a1] dang
 gzhan dbang dang yongs ^[G432b2] su grub pa gsum po ^[D306b3] rnams kiyis bsdus pa dang so so ba brjod par
ni shes par bva ste zhes bya ba la brtags pa dang gzhan dbang la ^[C313b3] sogs pa mtshan nyid byas zin

²⁸ 拙稿 [2020; § 2] 参照。

²⁹ 拙稿 [2022; § 5] 参照。なお、この考え方は、『摂大乘論』の発想に近い。

[P350a2] pa nams kyi [N351a6] kha cig tu ni (kha cig tu ni DC; kha gcig tu ni GP; kha cig tu na N) bsdus pa'i tshogs pa nams dang/
 [G432b2] kha cig tu ni (kha cig tu ni GDC; kha gcig tu ni PN) so so ba ste re re'am/ (so so ba ste re re'am/ DC; re re'am PN; ra'i'am G) gnyis
 gnyis shes rab kyi pha rol tu phyin [D306b4] pa'i gzhung 'dir brjod par ni (ni DC; ni/ GPN) shes par bya ste zhes
 bya ba gsal bar byas [P350a3] par nges par bya ba'o//

そこ『般若波羅蜜多經』においては以上のようにして〔三つの独自の存在（あるいは、独立する存在）の〕説示が確立されるというのであれば、[さらに]以下のことが言われる——「十〔種〕の〔誤った〕思考という〔心を〕散乱させるものに」云々と。 さて (gang du, *atha)、「『般若波羅蜜多經』における三つの存在（三性）の〕説示の方法は、十〔種〕の〔誤った〕思考という〔心を〕散乱させるものに対抗することを目的とするので」と言われているが、「対抗するもの」

(mi mthun phyogs, *vipakṣa-, 對治)とは、[それと]相反するもの ('gal ba'i phyogs, *viruddhapakṣa-, 相違對治)であって、[それと]相對するもの (gnyen po, *pratipakṣa-, 能所對治) という意味である。 その「『般若波羅蜜多經』における三つの存在（三性）の〕説示の方法」(bstan pa'i tshul, *deśanākrama-)については、[誤って]構想されているもの (brtags pa, *kalpita-, 遍計)と他に依存しているもの (bzhan dbang, *paratantra-, 依他)と完成したもの (yongs su grub pa, *pariṇiṣpanna-, 圓成實)という「三〔つの存在〕」が「一纏めに、あるいは、別々に説かれていると知られるべきである」(bsdus pa dang so so ba brjod par ni shes par bya ste, *boddhavyaṃ samastavyastakīrtanam)と言われているが、[それは、]「誤って」構想されているもの (brtags pa, *kalpita-, 遍計)・他に依存しているもの (bzhan dbang, *paratantra-, 依他)などとして特徴付けられているものが、或る場合には、「一纏めに」(bsdus pa, *samasta-) [すなわち、] 総体 (tshogs pa) として、そして、或る場合には、「別々に」(so so ba, *vyasta-) [すなわち、] 一つずつ (re re, *ekaika-)、あるいは、二つずつ (gnyis gnyis, *dvayadvaya-)、「ここにおいて」('dir, *iha) [すなわち、]『般若波羅蜜多〔經〕』の本文において、「説かれていると知られるべきである」、すなわち、明らかにされていると確信されるべきである (nges par bya) [ということである。] 【T25, 907b13-24】

かくして、『般若波羅蜜多經』においては、十種の分別散乱に対抗するために、適宜、「[誤って]構想されているもの」(遍計所執性)・「他に依存するもの」(依他起性)・「完成したもの」(円成実性)という三つの存在（三性）が説示されているとしても、陳那が述べるように、これらの三つの存在が一纏めに説示されている実例など現実にあるのであろうか、という疑念が起りうる。この疑念を払拭するために、陳那は、『八千頌般若波羅蜜多經』の冒頭を意図しながら、以下のような具体例を

提示する。

PrPPS v. 31:

yathādivākye niṣpannaparatantprakalpitaḥ/

abhāvakalpanārūpavikṣepavinivāraṇam//31//

G414a3/ P334b5/ N335b1/ D293b6f./ C300a7f.:

[G414a3/ P334b5] dper na grub dang gzhan dbang dang//

rab tu [C300b1] brtags pas ngag dang por//

dngos po med par rang bzhin gyis//

rnam par [D293b7] g-yeng ba sel ba bzhin//

例えば、『般若波羅蜜多經』の初めの文においては、完成したものと他に依存しているものと
 「誤って」構想されているもの〔の説示〕を通して、〔存在するものを〕存在しないとする〔誤
 った〕構想を特性とする〔心を〕散乱させるものが否定されている。【T25, 913b16f.】

この偈文を註釈するにあたって、三宝尊は、『八千頌般若波羅蜜多經』の原文を引用しながら、以
 下のように述べる。

PrPPSV G432b3-6/ P350a3-6/ N351a6-351b3/ D306b4-7/ C313b3-6:

yang rtags (rtags GPN; rtag DC) pa (pa DC; omit. GPN) la sogs [N351a7/ C313b4] pa (sogs pa GPN; sog+ pa C) bsdus pa rnam (bsdus
 pa rnam DC; bsdus pa rnam GPN) gang du (gang du GPN; gong du DC) bstan snyam du dogs [G432b4] pa bsu nas brjod pa (brjod pa
 NDC; rjod pa GP) ni dper na (dper na GPDC; dper na/ N) zhes bya ba la sogs pa'o// dper na brgyad stong pa nyid kyi
ngag dang por te/ [D306b5] rab [P350a4] 'byor byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnam kyis shes [N351b1]
 rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams nas ji ltar byang [C313b5] chub [G432b5] sems dpa' sems dpa' chen po
 rnam ji ltar shes rab kyi pha rol tu phyin [P350a5] pa las nges par 'byung ba de bzhin du khyod spobs par
 byos shig ces bya ba'i [D306b6] ngag yin pa 'di lta bu'i [N351b2] ngag dang po 'dir yongs su grub pa (yongs su grub pa
 DC; yong grub GN; yod grub P) dang gzhan dbang dang rab tu brtags [G432b6] pa ji skad bshad pa'i mtshan [C313b6]
 nyid can bsdus [P350a6] pa rnam khong nas (khong nas DC; kho nas GPN) yongs su grub pa (yongs su grub pa PDC; yongsu grub pa
 GN) la sogs pa'i rang bzhin gyis dngos po ni med pa yin no (yin no PDC; yino GN) zhes bya ba de lta bu'i rang bzhin
 can (rang bzhin can PNDC; rang bzhin G) gyi rnam par g-yeng [N351b3/ D306b7] ba bcom ldan 'das kyis sel ba bzhin no//

(bzhin no// PDC; bzino// GN)

しかしながら、[誤って] 構想されているものなど (brtags pa la sogs pa, 遍計等, *kalpitādi-) [という三つの独自の存在 (あるいは、独立する存在)] が一纏めにされたもの (bsdus pa, *samasta-) は、『般若波羅蜜多經』の「何処で説かれていたでしょうか、という懸念に対して (dogs pa bsu nas, *āśaṅkya) 曰く—— 「例えば」云々と。 「例えば、」『八千[頌般若波羅蜜多經]』の「初めの文においては」[三つの独自の存在 (あるいは、独立する存在)] が一纏めにされたものが説かれていっていることである。そして、何であれ、]「スプーティ (rab 'byor, *subhūti-, 須菩提) よ。菩薩 (byang chub sems dpa', *bodhisattva-, 菩薩) 摩訶薩 (sems dpa' chen po, *mahāsattva-, 摩訶薩) たちが、如何にして (ji ltar, *yathā)、完成した智慧 (shes rab kyi pha rol tu phyin pa, *prajñāpāramitā-, 般若波羅蜜多) へと向かって行くべきであるか (nges par 'bhyung ba, *niryāyuh, 出生)。[その] 菩薩摩訶薩たちの完成した智慧 [を発現させるための修行] について (shes rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams nas, *prajñāpāramitām ārabhya, 般若波羅蜜多應當發起) [の理解が] 君に (khyod, *te, 隨汝) ひらめくように (spobs par byos shig, *pratibhātu, 樂説)³⁰ という文があるが、このような [文] が『八千頌般若波羅蜜多經』の「初めの文である。そこには、[既に] 説明されたような特徴を有する (ji skad bshad pa'i mtshan nyid can, *yathoktalakṣaṇa-) 完成したもの (yongs su grub pa, *pariṇiṣpanna-) と 他に依存しているものと[誤って] 構想されているものと (gzhan dbang dang rab tu brtags pa, *paratantraprakalpita-) が一纏めにされた [説示] (bsdus pa, *samasta-) が含まれていて、完成したもの (yongs su grub pa, *pariṇiṣpanna-) などの本性 (rang bzhin, 自色相, *svarūpa-) [の説示] を通して、「存在するものは無い」というような本性 (rang bzhin, 自色相, *svarūpa-) を有する 「心を」 散乱させるもの (mam par g-yeng ba, *vikṣepa-) が、世尊によって、否定されているのである。【T25, 907b24-907c6】

そして、三宝尊は、ここに引用した『八千頌般若波羅蜜多經』の冒頭の原文に対して、以下のような逐語的註釈を施す。

PrPPSV G432b6-433a4/ P350a6-350b3/ N351b3-7/ D306b7-307a3/ C313b6-314a3:

³⁰ ASPrPS (AAĀPrPVy) 22, 8ff.: pratibhātu te subhūte bodhisattvānām mahāsattvānām prajñāpāramitām ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitām niryāyur iti (スプーティよ。菩薩摩訶薩たちが如何にして般若波羅蜜多 (完成した智慧) へと向かって行くべきであるか。[その] 菩薩摩訶薩たちの般若波羅蜜多 (完成した智慧) を発現させるための修行) について [の理解が] 君にひらめくように)。

yang **ngag** ^[G433a1] **dang** ^[P350a7] **por** 'di ci nas don gsum bstan pa yin no (yin no PNDC; yino G) zhes bya ^[C313b7] ba
 de lta bur ji lta shes she na/ (she na/ DC; zhe na/ GPN) gang gi phyir **ngag** 'dir (dir DC; omit. GPN) bsdus pa'i don ni 'di
 yin te/ ji lta byang chub sems dpa' sems dpa' ^[N351b4] chen po rnam ^[P350a8] shes rab kyi pha rol ^[G433a2] tu
 phyin ^[D307a1] pa la (pha rol tu phyin pa la DC; pha rol tu phyin par GPN) nges par 'byung bar zhes 'gro ba dang nges par 'byung
 ba thob pa'am yang na 'jug pa zhes bsams ^[C314a1] pa ste/ (bsams pa ste/ DC; bsams te/ GPN) khamns mams kyi don ni de
 ma yin pa'i phyir ro// (phyir ro// DC; phyir/ GPN) yang na nges par ^[P350b1] 'byung bar gyur cig (nges par 'byung bar gyur cig
 DC; nges par gyur cig GPN) ces ^[N351b5] gdon te 'dir ni (gdon te 'dir ni DC; don 'dir ni GPN) smon pa la byung zin pa bzhin legs
 (smon pa la byung zin pa bzhin legs DC; smon pa byung zin pa bzhin legs P; smon pa byung zin pa bzhin let G; sman pa byung zin pa bzhin legs N) ^[G433a3] zhes
 bya ba yu'i ^[D307a2] sgra brjod pa'i phyir te/ bcom ldan 'das (bcom ldan 'das PNDC; bcomdas G) kyis byang chub sems
 dpa' rnam kyi nges par 'byung ba la (nges par 'byung ba la DC; nges par 'byung ba GPN) de ^[C314a2] lta smon pa yin te/ ^[P350b2]
 de lta byang chub sems dpa' sems dpa' ^[N351b6] chen po (sams dpa' chen po PNDC; sems chen po G) rnam kyis shes rab
 kyi pha rol tu phyin pa las brtsams nas ^[G433a4] ni/ yul du byas nas rab 'byor khyod spobs ^[D307a3] par byos
 shig ces bya ba ^[P350b3] yin no// (yin no// PDC; yino// GN) de lta spobs par gyis shig ste (spobs par gyis shig ste DC; spobs par
 gyis te GPN) shes rab kyis spobs par ^[C314a3] byos shig ces bya ba gyis shig ^[N351b7] pa'o//

さらに、「初めの文において」(ngag dang por, *ādivākye)、この「誤って構想されているもの・他に依存しているもの・完成したものという」三つ〔の存在〕の内容は、どのように説かれているか。〔また、三つの存在の内容が説かれているとしても、〕そうである（そこに三つの存在の内容が説かれている）と、どうして知られるのか、と〔問うので〕曰く——〔そこに三つの存在の内容が説かれているということが、どうして知られるかと言えば、〕何となれば、これ（三つの存在の内容）こそが、この〔初めの〕文における要旨 (bsdus pa'i don, 要) であるからである。「菩薩 (byang chub sems dpa', *bodhisattva-, 菩薩) 摩訶薩 (sams dpa' chen po, *mahāsattva-, 摩訶薩) たちが、如何にして (ji lta, *yathā)、完成した智慧 (shes rab kyi pha rol tu phyin pa, *prajñāpāramitā-, 般若波羅蜜多) へと向かって行くべきであるか (nges par 'bhyung ba, *niryāyuh, 出生)」という〔文における〕「向かっていくべきである」(nges par 'bhyung ba, *niryāyuh) 〔という語の意味〕は、〔完成した智慧へと向かって、三界から〕出て行く〔ということであり、〕あるいは、〔三界から出て、完成した智慧に〕到達する〔ということであり、〕はたまた、〔三界から出て、完成した智慧が発現している状態へと〕入るということであると考えられる。〔何となれば、三〕界における事物は、それ（完成した智慧）ではないからである³¹。さらにまた、「向かって行くべきであ

³¹ Cf. ASPrPS (AAĀPrPVy) 98, 7-11; 104, 17ff.: yad api subhūte evaṃ vadasi <=> ^[1] katham vā tat-

samprasthito veditavyah. ^[2] kuto vā tan mahāyānaṃ niryāsyati. ^[3] kena vā tan mahāyānaṃ samprasthitam. ^[4]
 kva vā tan mahāyānaṃ sthāsyati. ^[5] ko vānena mahāyānena niryāsyatīti. ^[1] pāramitābhiḥ samprasthitāḥ. ^[2]
 traidhātukān niryāsyati. ^[3] yena <an>ārambaṇaṃ tena samprasthitam. ^[4] sarvajñatāyāṃ sthāsyati. ^[5] bodhisattvo
 mahāsattvo niryāsyati (また、スプーティよ。君は、「^[1] [菩薩摩訶薩は、] どのような状態で、そ
 の大きな乗り物] (大乘, mahāyāna-) に乗り込んだと知られるべきで、また、^[2] その大きな乗り物 (大
 乗) は、どこから、[完成した智慧へと] 向かって行く [と知られるべきで、] また、^[3] その大きな乗
 り物 (大乘) は、どのような方法で、[菩薩摩訶薩によって] 乗り込まれた (= 菩薩摩訶薩は、どの
 ような方法で、その大きな乗り物に乗り込んだ) [と知られるべきで、] また、^[4] その大きな乗り物
 (大乘) は、どこで、停留する [と知られるべきで、] また、^[5] 誰が、その大きな乗り物に乗って、
 [完成した智慧へと] 向かって行く [と知られるべきです] か」と、このように問うたが、^[1] [菩薩
 摩訶薩は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧という六つのものを] 完成した状態(波羅蜜多, pāramitā-)
 で、[その大きな乗り物 (大乘) に] 乗り込んだ [と知られるべきで、また、] ^[2] [その大きな乗り物
 (大乘) は、] 三界 (traidhātuka-) から、[完成した智慧へと] 向かって行く [と知られるべきで、ま
 た、] ^[3] [その大きな乗り物 (大乘) は、] 抛り所を持たない (anārambaṇa-) という仕方、[菩薩摩
 訶薩によって] 乗り込まれた (= [菩薩摩訶薩は、] 抛り所を持たないという仕方、[その大きな乗
 り物に] 乗り込んだ) [と知られるべきで、また、] ^[4] [その大きな乗り物 (大乘) は、] 一切知者とい
 うあり方 (sarvajñatā-) において停留する [と知られるべきで、また、] ^[5] 菩薩 (bodhisattva-) 摩訶
 薩 (mahāsattva-) が、[その大きな乗り物に乗って、完成した智慧へと] 向かって行く [と知られる
 べきです]。しかしながら、以上の解釈は、世俗諦を適用したもの (AAĀPrPVy 104, 27: samvrti-
 satyāśrayeṇa yojyam) であって、勝義諦を適用した場合には、以下のように解釈されるとされる。
 ASPrPS (AAĀPrPVy) 104, 28-105, 3; 104, 15f.; 104, 20-21: api tu khalu punar ^[2] na kutaścin niryāsyati. ^[3] na
 kenāpi samprasthitam. ^[4] na kvacit sthāsyati. api tu sthāsyati sarvajñatāyāṃ asthānayogena. ^[5] nāpi kaścit tena
 mahāyānena niryāto nāpi niryāsyati nāpi niryāti. tat kasya hetoḥ. yaś ca niryāyāt<> yena ca niryāyāt<> ubhāv
 etau dharmau na vidyete nopalabhyete. evam avidyamāneṣu sarvadharmeṣu katamo dharmāḥ katamena
 dharmeṇa niryāsyati (しかしながら、そうであったとしても、やはり、^[2] [その大きな乗り物 (大乘)
 は、] どこから [完成した智慧へと] 向かって行くわけではない [と知られるべきで、また、] ^[3]
 [その大きな乗り物 (大乘) は、] 何らかの方法で [菩薩摩訶薩によって] 乗り込まれたわけではな
 い (= [菩薩摩訶薩が、] 何らかの方法で [その大きな乗り物に] 乗り込んだわけではない) [と知ら
 れるべきで、また、] ^[4] [その大きな乗り物 (大乘) は、] どこかに停留するわけではなく、むしろ、
 停留しないという方法で一切知者というあり方に停留する [と知られるべきで、また、] ^[5] 誰かが、
 その大きな乗り物に乗って、[過去において、完成した智慧へと] 向かって行ったことがあるわけでも
 なく、[未来において、完成した智慧へと] 向かって行くだろうこともなく、[現在において、完成
 した智慧へと] 向かって行きつつあるわけでもない [と知られるべきです。] それは、なぜか [と言
 うならば、仮に、完成した智慧へと向かって行く者が存在するとしたならば、] その人が [完成した
 智慧に] 向かって行くことがあるかもしれず、また、[完成した智慧に向かって行くための乗り物が
 存在するとしたならば、] その [の乗り物] に乗って [完成した智慧に] 向かって行くことがあるかも
 しれないが、そのような事物は、両方とも、存在せず、知覚されない [からである。] このように、
 あらゆる事物が存在しないのであるから、どのような事物が、どのような事物を用いて [完成した
 智慧へと] 向かって行くことがあろうか。[いや、ない]。

る」(nges par 'bhyung ba, *niryāyuh, 出生)とは、[未来に] 出発する[という意味]であるが、ここにおいては、“yu<r>”という[接尾]辞が添えられているがゆえに、願望(smon pa)としては、[完成した智慧へと]向かって[既に]出発しているのがふさわしい、という[意味]となる。菩薩摩訶薩が[完成した智慧へと]向かっていくことについて、世尊には、以下のよう願望がある。すなわち、「[その]菩薩摩訶薩たちの完成した智慧[を発現させるための修行]について (shes rab kyi pha rol tu phyin pa las brtsams nas, *prajñāpāramitām ārabhya, 般若波羅蜜多應當發起)」「[すなわち、完成した智慧を発現させるための修行を]対象領域として (yul du byas nas, 諸境界事)、「スプーティよ。君に (khyod, *te, 随汝) [理解が] ひらめくように (spobs par byos shig, *pratibhātu, 樂説)」と[世尊は願っていらっしゃるのである。] ここにおける「ひらめくように」(spobs par byos shig, *pratibhātu)とは、智慧によって明らかにせらるべし[という]義務(ces bya ba gyis shig pa, *itikartavya-)である。【T25, 907c6-16】

是くのごとく、「[誤って]構想されているもの」(遍計所執性)・「他に依存するもの」(依他起性)・「完成したもの」(円成実性)という三つの存在(三性)が一纏めに説示されている実例として、『八千頌般若波羅蜜多經』の冒頭の原文が引用され、その内容が逐語的註釈によって審らかになった。しかるに、一体、この文のどの箇所が、それぞれ、三つの存在(三性)に対応していると言うのか。三宝尊は、以上のような読者の疑問に答えるために、以下のように解説する。

PrPPSV G433a4ff./ P350b3f./ N351b7f./ D307a3f./ C314a3f.:

spobs par byos shig ces bya bas gngang ba byos shig pa ste bstan pa 'dis ni (gngang ba byos shig pa ste bstan pa 'dis ni DC; gngang ba byos shig pa 'dis ni GPN) *gzhan gyi dbang* [G433a5/P350b4] *brjod par mdzad do//* (mdzad do// PNDC; mdzad do// G) *rab 'byor zhes bya ba* (zhes bya ba DC; ces bya ba GPN) *la* [D307a4] *sogs pa rnams don nyid du bstan pas ni brtags pa brjod pa'o// ci nas byang chub sems* [C314a4] *dpa'* [N352a1] *sems dpa' chen po rnams shes* [P350b5] *rab kyi pha rol tu phyin par nges par 'byung ba* (nges par 'byung ba GPND; ngas par 'byung ba C) *zhes bya ba 'dis* ('dis GPN; 'di DC) *ni yongs su grub* [G433a6] *pa* (yongs su grub pa PNDC; yongsu grub pa G) *brjod pa mdzad pa yin no//* (yin no// PDC; yino// GN)

「ひらめくように」(spobs par byos shig, *pratibhātu)と言って、[世尊により]義務的命令(gngang ba byos shig pa, *kartavyavidhi-) [が説示された] が、この説示によって[世尊により]他に依存するものが示されている。「スプーティよ」云々と言って、対象として[スプーティを]説示することによって、[誤って]構想されているものが示されている。「菩薩 (byang chub sems

dpa', *bodhisattva-, 菩薩) 摩訶薩 (sems dpa' chen po, *mahāsattva-, 摩訶薩) たちが、如何にして (ci nas, *yathā)、完成した智慧 (shes rab kyi pha rol tu phyin pa, *prajñāpāramitā-, 般若波羅蜜多) へと向かって行くべきであるか (nges par 'bhyung ba, *nirāyuh, 出生)」という、こ〔の箇所の説示〕によっては、完成したものが示されている。【T25, 907c16-21】

『八千頌般若波羅蜜多經』の冒頭の原文には、まず、釈尊による教化の対象として「スプーティ」(rab 'byor, 須菩提, *subhūti-) という菩薩が登場する。次に、釈尊は命令法のかたちで「ひらめく」(prati-√bhā-) という動詞を用いる。そして、菩薩が向かって行くべき目標として「完成した智慧」(shes rab kyi pha rol tu phyin pa, *prajñāpāramitā-, 般若波羅蜜多, *prajñāpāramitā-) が示される。三宝尊によれば、まず、このうちの「スプーティ」という人物が、「[誤って] 構想されているもの」(遍計所執性)を示唆するものであるという。そして、「ひらめく」という動詞が、「他に依存するもの」(依他起性)を暗示するものであるという³²。なお、「完成した智慧」が「完成したもの」(円成実性)

³² ここにおける「ひらめく」(prati-√bhā-) という動詞と「他に依存するもの」(依他起性)との関連性は、最終的には、この動詞の派生語である「ひらめき」(pratibhā-) と「顕現」(pratibhāsa-/ābhāsa-) との関連から類推される。というのも、陳那ないし三宝尊は、依他起性を規定する際に、「或るもの (A) が、[所取・能取という] 二つのものを有しない智の上に……無明に依存することによって、二つのものとして顕現している場合、そ〔の二つのものの顕現〕 (A) が……他に依存するものと呼ばれる」と述べているからである (拙稿 [2022; § 2] 参照)。

そこで、陳那の論書における「ひらめき」(pratibhā-) の用例を閲するに、この語は、一貫して、文の意味論の文脈において用いられ、まさしく、「文の意味」(vākyārtha-) を表す語として使用される。そして、「顕現」(pratibhāsa-) との関連性については、陳那においては、未だこれを見出すことができない。具体例は以下の通りである。PSV (V) A18, 10-17: atra ca apoddhāre padasāyāṃ vākyād artho vikalpitaḥ vākyārthaḥ pratibhākhyo 'yaṃ tenādāv upajanyate [PS (V) k. 46] <yasmād ādāv anabhyastaśabdārthasambandhānām padārthagrahaṇopāyā vākyārthapratibhā> (また、このこと (言葉の意味が他の排除であること) については、[以下のように説かれる——] 単語が文から抽出される場合、その [単語の] 意味は [想定によって] 構想される。[そして、] ひらめき (pratibhā-) と呼ばれる、この文の意味 (vākyārtha-) は、最初は、それ (単語の意味) によって生起する。 [PS (V) k. 46]何となれば、最初は、[すなわち、] 言葉と意味の結び付きに習熟していない人々においては、文の意味 (vākyārtha-) としてのひらめき (pratibhā-) は、単語の意味を把握することによって生ずるからである。)。なお、以上のように文の意味を「ひらめき」とする陳那説は、同時代の文法哲学者・バルトリハリの学説を受容したものであることが知られている (服部 [1980] 参照)。さらにまた、陳那は、この「ひらめき」が概念知 (vikalpa-) の働きであることを強調する。具体例は、以下の通りである。PSV (V) A18, 23-28: yathābhyāsaṃ hi vākyebhyo vināpy arthena jāyate svapratyāyānukāreṇa pratipattir anekadhā [PS (V) k. 47] <asaty api bāhye 'rthe> svapratyāyānurūpyenārthābhyāsavāsānapekṣā vākyād arthakriyāpratipattir nānārūpotpadyate vikalpaś ca, vyāghrādīśrutivat. tadaviśeṣe vā śrīgārakāvyaśya śravaṇād rāgināṃ rāgānurūpā pratītir bhavati, vītarāgānāṃ tu

saṃvegānurūpā (実に、[外界の]対象がなかったとしても、文[を聞くこと]により、[文とその意味に関する]習熟にしたがって、自己の[保有する]条件に似通ったかたちで、[目的を達成するための行為に関する]理解が多様なあり方で生ずるのである。[PS (V) k. 47] 外界の**対象**が存在しないとしても、**文**[を聞くこと]により、[文とその]意味に**習熟すること**により植え付けられた潜在余力を拠り所として、**自己の[保有している]条件(潜在余力)**に準ずるかたちで、目的を達成するための行為(arthakriyā-)に関する**理解**(pratipatti-)が、様々なあり方で生起する。そして、[その目的を達成するための行為に関する理解とは]概念知(vikalpa-)である。例えば、トラ[という語を]聞いたとき[に、実際にトラがいなかったとしても、トラに関する理解が生起するの]と同様である。あるいは、恋愛の詩歌を聞くことにより、そ[の詩歌の内容]に違いがないにもかかわらず、貪愛を有する人々においては、[その]貪愛に準ずるかたちで[その詩歌に関する]理解が生じ、一方、貪愛を打ち捨てた人々においては、嫌悪に準ずるかたちで[その詩歌に関する理解が生ずるのと同様である]。以上における「目的を達成するための行為に関する**理解**」(arthakriyāpratipatti-)は、文の意味であるところの「ひらめき」(pratibhā-)とほぼ同義であると推察される。そして、この「理解」は、「[文とその]意味に**習熟すること**」により植え付けられた潜在余力を拠り所として」(arthābhyaśavāsānāpekṣa-)生起するものとされている。勿論、この「理解」は、「概念知」(vikalpa-)と明言されていることから、その機能上、まずは、遍計所執性に分類されるものとして吟味する必要があるが、「潜在余力を拠り所と」することを力説しているところからすると、存在論的には「他に依存するもの」(依他起性)との関連性が密かに意図されている可能性もないとは言えない。しかし、いざいれにせよ、「ひらめき」と「顕現」とを結び付けようとする意図は極めて稀薄であると言えよう。

以上の陳那の議論は、言葉(śabda-)が、推論(anumāna-)と同様に、他の排除(anyāpoha-)として機能するとの文脈で語られたものであるが、彼の後進の法称(Dharmakīrti-, ca. 6世紀中葉から7世紀中葉)もまた、この議論を受け継ぎつつ——ただし、先行研究においても度々指摘されるように、陳那と法称との間には、その目的意識に関して、態度の相違が見られる。すなわち、陳那は、他学派と議論する際の基盤を構築することを目的として、相互の共通見解を見出すことを模索していた。そのため、この言葉の意味の問題についても、その目的意識の下に論じられている。一方、法称は、そのような陳那の構想を振り切って、仏教独自の概念論の確立することを主眼として議論を展開している——推論の対象について吟味する際に、「ひらめき」(pratibhā-)なる語を用いる。

法称による当該の議論の概要は、以下の通りである——陳那ないし法称によれば、妥当な認識(pramāṇa-)は、直接知覚(pratyakṣa-)と推論(anumāna-)のただ2種のみであるとされる。そして、それらは、その対象の違いによって分類される。すなわち、個別相(svalakṣaṇa-)を対象とするのが直接知覚であり、共通相(sāmānyalakṣaṇa-)を対象とするのが推論である。ところが、法称によれば、優れた智慧を有するヨーガ行者たちによっては、共通相が個別相と同時に直接知覚によって認識されていることがあると言われる。このような場合、個別相かつ共通相を同時に知覚する第三の妥当な認識が存在するのではないかという疑念が生ずる。しかし、法称によれば、この際に生起する“推論”は、既に把握されている共通相を再び把握することとなるがゆえに、妥当な認識でないこととなると言われる。よって、妥当な認識は、あくまでも直接知覚と推論の2種のみであり、その他は存在しないことになる。法称による具体的な議論は、以下の通りである。P.V. 147, 13-148, 9: nanv anityo 'yaṃ varṇa itī svalakṣaṇe yojanā<> tat katham yojanād varṇasāmānya [PV II. 79c] ity uktam. atrāha <—> anumānād anityāder grahaṇe 'yaṃ kramo mataḥ/ prāmāṇyam eva nānyatra grhītagrahaṇān matam// [PV II. 101] anumānāt parokṣasyānityāder dharmasya grahaṇe vastusāmānyam anityatvena grhyata ity ayaṃ kramo mataḥ. varṇasāmānyam ca pratyakṣataḥ

siddham<,> tadbalaabhāvinā vikalpena vijāṭiyavyāvṛtṭyāśrayeṇa vyavasthāpanāt. yas tu vinaśvaram varṇṇam dṛṣṭvā 'nityo 'yam iti viśeṣaviśayaḥ anumānād anyatra tatra prāmāṇyam eva na matam grhītagrahaṇāt. katham grhīta-grāhītvam ity āha <—> nānyāśyānityatā bhāvāt pūrvasiddhaḥ sa caindriyāt/ nānekārūpo vācyo 'sau [PV II. 102abc] nānyā bhāvād varṇṇāder anityatā<—> tasyaiva kṣaṇakṣayisvabhāvatvāt. sa ca bhāva aindriyāt pratyakṣāt siddhaḥ. pūrvam vikalpāt. tatas tam eva yathāgrhītam vikalpayan vikalpo grhītagrāhī kas tarhi vācyo ity āha <—> vācyo dharmo vikalpajah// [PV II. 102d] vikalpajo vijāṭiyāśrayeṇa vikalpakalpito dharmah paraspāram yathāsaṃketam asaṃkīrṇṇaḥ śabdānām vācyah (【対論者】「この色は無常である」という場合には、[無常性が、色という] 個別相 (svalakṣaṇa-) に結び付けられているではないか。そうであるのに、「色 (varṇa-) の共通相 (sāmānya-) に [無常性が] 結びつけられるがゆえに」 [PV II. 79c] と説かれるのは、どうしてか。【定説者】これに対して [以下のように] 説かれる—— [認知されていない] 無常など [という特性] が推論により把握される場合には、以上のような [個物の共通相に無常性が結びつけられるという] 機序が認められる。[しかし、推論とは] 別に [「これは無常である」という個物を対象とする智が生じた] 場合には、[その智は] 妥当な認識であるとは認められない。[何となれば、その智は、既に] 把握されているものを [再び] 把握しているからである。[PV II. 101] 推論 (anumāna-) により、認知されていない無常などという特性が把握される場合には、実物 (vastu-) の共通相 (sāmānya-) が無常であると把握されるという、以上のような機序 (krama-) が認められる。というもの (ca)、色の共通相は、直接知覚によって [既に] 認知されているが、その [直接知覚] の影響下にある分別——異類のもの (vijāṭiya-) を差別化する [機能] (vyāvṛtti-) の拠り所——によって、[まず、色の共通相が、色という個別相と共通相とに差別化され、次に、その共通相に未だ認知されていない無常などの特性が結びつけられるという一連の作用が] 確立されるからである。しかし、何であれ、消滅することを免れえない色を見た後に、「この色」は無常である」という個物を対象とする [智] (A) が推論とは別に [生じた] 場合、その [智] (A) は妥当な認識であるとは認められない。[何となれば、その智 (A) は、既に] 把握されているものを [再び] 把握しているからである。【対論者】どうして、[その個物を対象とする智 (A) は、既に] 把握されたものを [再び] 把握するものである [と言われる] のか、と [対論者が問うので] 曰く—— その [事物] にある無常性は事物と別個のものではない。そして、その [事物] は、感官知により、[分別されるより] 以前に [既に] 認知されている。[また、分別されるより以前には、] その [事物] は、[無常性や所作性などといった] 多様なあり方を有するものであるので、[言葉により] 説かれうるものでない。[PV II. 102abc] 色などにある無常性は、[色などの] 事物と別個のものではない。[何となれば、] その同じ [事物] が、刹那毎に消滅することを本性としているからである。そして、その事物は、感官知により、[すなわち、] 直接知覚により、[既に] 認知されている。[以前に] とは、分別されるより [以前に、という意味である。] このゆえに、その同じ [事物] を、[以前に直接知覚により] 把握されたときと同じあり方で、[再び] 分別しているので、[その] 分別は、[既に] 把握されたものを [再び] 把握するもの [と言われるの] である……。【対論者】それでは、[言葉により] 説かれるうるものとは何か、と [対論者が問うので] 曰く—— 【定説者】[言葉により] 説かれうるものは、分別から生じる特性である。[PV II. 102d] 分別から生ずる、[すなわち、] 異類のもの (vijāṭiya-) [を差別化する機能 (vyāvṛtti-)] の拠り所たる分別によって構想された特性は、言語協約にしたがって相互に混同されることがないので、言葉により説かれうる。以上から分かることは、法称が論題としているのは、確かに、推論の対象である「共通相」(sāmānyalakṣaṇa-) であるが、問題とされているのは、その「共通相」が、推論される場合の事象ではなく、直接知覚される場合の事象であるということである。実に、法称によって語られる「ひらめき」(pratibhā-) は、この文脈の中で論じられるため、共通相を確定する直接知覚を意味する語として登場す

るのである。つまり、先の陳那の「ひらめき」が概念知であったのに対して、法称の「ひらめき」はヨーガ行者の鍛錬された直接知覚を表すのである。「ひらめき」に関する法称の具体的な議論は、以下の通りである。PVV 149, 13-150, 1: *vyavyasantiḥkṣaṇād eva sarvākārān mahādhiyaḥ*// [PV II. 107cd] *ye tu mahādhiyo <viparītavyavasāyān ākrāntapratyakṣa yoginas>*, *te padārthasya iḥkṣaṇād eva sarvvān ākārān vyavyasyanti niścinvanti so 'sati bhrāntikāraṇe/ pratibhāḥ pratisandhatte svānurūpāḥ svabhāvataḥ*// [PV II. 109bcd] *sa bhāve 'sati bhrāntikāraṇe yathābhāsaṃ svānurūpāḥ svavyāvṛttisamucitāḥ pratibhā niścayabuddhiḥ svabhāvataḥ pratisandhatte utpādayati. tasmād abhyāsavatām iḥkṣaṇād evānityādinīścayaḥ* (「一方、」大いなる智慧を有する者たちは、[対象における] あらゆる形相を、ただ [直接的な] 観察のみに基づいて、確定する。[PV II. 107cd] 一方、或る者たち (A) が、大いなる智慧を有する者 (mahādhi-) である場合、[すなわち、] 不顛倒の決定知 (aviparītavyavasāya-) にまで到達した直接知覚 (pratyakṣa-) を保持するヨーガ行者 (yogin-) である場合、彼ら (A) は、事物 (padārtha-) における あらゆる形相 (ākāra-) を、ただ [直接的な] 観察 (iḥkṣaṇa-) のみに基づいて、確定する。[すなわち、] 決定するのである……。[認識の対象となる事物に] 迷乱の原因が存在しない場合には、そ [の事物] は、[修習により植え付けられた観察者] 自身 [の潜在余力] に準じたあり方のひらめきを [観察者の知] それ自体の中から生み出すのである。[PV II. 109bcd] [認識の対象となる] 事物に 迷乱の原因が存在しない場合には、そ [の事物] は、[観察者の] 修習にしたがうあり方で、[修習により植え付けられた観察者] 自身 [の潜在余力] に準じたあり方の、[すなわち、観察者] 自身の差別化する機能に順応した、ひらめき (pratibhā-) を、[すなわち、] 決定知 (niścayabuddhi-) を、[観察者の知] それ自体の中から、生み出す。[すなわち、] 生起させるのである。このゆえに、修習している者たちにおいては、ただ [直接的な] 観察のみに基づいて、無常 [であること] などが決定されるのである)。この議論を踏まえると、法称の言う「ひらめき」(pratibhā-) は、端的には、ヨーガ行者が保持する「不顛倒の決定知にまで到達した直接知覚」(aviparītavyavasāyān ākrāntapratyakṣa-) であることが分かる。そして、このような「直接知覚」は、言わば、個別相や共通相が渾然一体たる状態で智の上に顕現していることを意味するから、「顕現」(pratibhāsa-/ābhāsa-) なる語は直接的には明示されないものの、「ひらめき」と「顕現」との関連性が、法称によって暗示されていることを物語る。よって、暗示的ではあるものの、ここに、「ひらめき」と「他に依存するもの」(依他起性)との関連性が示されたことになる。

この法称以後の議論として、「ひらめき」と「顕現」との関連性が明示される事例としては、シヴァ教再認識派の議論が知られる。以下には、ウトバラデーヴァ (utpaladeva-, ca. 925-975) の言及を 2 例引用するが、ここでは、pratibhā-とābhāsa-と言い換えられている (議論の詳細は、戸田 [2007]、川尻 [2016] 参照)。ĪPV 28, 2-5: *tadatatpratibhābhājā mātiraivādatadvyapohanāt/ tannīścayanam ukto hi vikalpo ghaṭa ity ayaṃ*// [ĪPK I. 6. 3] *pramātur eva svatantrasyāntarlinatadatadarthābhāsaḥ adadapohanena ghaṭa iti niścayo vikalpo nāma vyāpāraḥ* (それ(例: 甕)とそれでないもの(例: 甕でないもの)との顕現を所有する (tadatadpratibhābhāj-) 認識主体 (mātr-) によって、それでないもの(例: 甕でないもの)が排除されること (vyapohana-) により、それ(例: 甕)の決定が[なされる。]「甕である」という、こ[の決定知]は、実に、分別 (vikalpa-) と言われる。[ĪPK I. 6. 3] それ(例: 甕)とそれでないもの(例: 甕でないもの)との対象の顕現を内包している (antarlinatadatadarthābhāsa-) 自立的な (svatantra-) 認識主体 (pramātr-) は、それでないもの(例: 甕でないもの)を排除すること (atadapohana-) により、「甕である」と決定する。[この決定する] 機能 (vyāpāra-) は、分別 (vikalpa-) と呼ばれる)。; ĪPV 31, 7-11: *yā caisā pratibhā tattatpadārthakramarūṣit/ akramānantacidrūpaḥ pramātā sa maheśvaraḥ*// [ĪPK I. 7. 1] *tattatpadārthakramacchuritaś caisō 'ntaḥsthita eva ābhāsaḥ sarvasaṃvitkālavyāpy akramānantacinmaya ātmasaṃjñāḥ pramātā svāṅgabhūte prameye nirmātrtayā*

を示すと言われるが、如何なる仕方によって否定されずに残るものとして「智」という事物を挙げ
る陳那と三宝尊との従前の主張に従えば、「完成した智慧」は、むしろ、「完成したもの」(円成実性)
そのものであることが知られる。

ここまで、陳那と三宝尊とは、無相分別散乱の解説([1])の中で、存在するものを存在しないとい
うかたちで誤って構想する心の散乱を否定し、そして、有相分別散乱の解説([2-1])の中で存在
しないものを存在するというかたちで誤って構想する心の散乱を否定して、その後、両分別の説明
において生ずる表現上の矛盾を解消するために、遍計所執性・依他起性・円成実性とと呼ばれる三つの
存在([2-2-0])を明らかにした。そして、この三つの存在と『般若波羅蜜多經』との一般的な関係
性([2-2-1]・[2-2-2]・[2-2-3])と具体的な関係性([2-2-4])とを示して、縷々、議論を展開してき
たわけであるが、今や、彼らは、無相分別と有相分別との矛盾を会通し終えて、再び、本来の主題の
有相分別散乱の解説に戻らんとする。

以下は、再び、本題の有相分別散乱の解説に戻って、改めて、その続きを述べる陳那の偈文であ
る。

PrPPS v. 32:

tena buddhaṃ tathā bodhiṃ na paśyāmīti vācakaiḥ/

ā samāpter iha jñeyā kalpitānāṃ nirākṛtiḥ//32//

G414a3f./ P334b5f./ N335b1f./ D293b7/ C300b1:

des na sangs rgyas ^[N335b2] de bzhin du//

byang chub ma thob ^[P334b6] par brjod pa//

yongs su (yongs su PNDC; yongsu G) ^[G414a4] rdzogs pa'i bar gyis 'dir//

brtags mams bsal bar shes par bya//

このこと(三つの存在は、一纏めに説かれることもあれば、別々に説かれることもあること)か
ら、ここ(『般若波羅蜜多經』)においては、終わりに到るまで、「私は、」同様に、仏陀をも「見

maheśvaraś ca (そして、その顕現(pratibhā-)は、個々の事物の[生成過程に応じた]漸次性によって穢
されているけれども、[本質的には、]漸次性と限界とを伴わない知を本性とする認識主体であり、大自在
神である。[ĪPK I. 7. 1]そして、その顕現(ābhāsa-)は、個々の事物の[生成過程に応じた]漸次性(krama-)
によって蔽われているけれども、内に向かっている限りは、あらゆる覚知の瞬間に随伴し、漸次性と限界
とを伴わない知により構成され、「アートマン」と呼ばれる認識主体であって、認識対象に関しては、自
己の一部であるので、創造主である[とみなされる]がゆえに、大自在神である)。

ず、] 覚りをも見ない³³」と説く方々によって、[存在しないものを存在するとする] 構想 [とう心を散乱させるもの] が否定されていると知られるべきである。【T25, 913b18f.】

三宝尊は、この偈文を以下のように逐語的に註釈する。

PrPPSV G433a6-433b4/ P350b5-351a4/ N352a1-7/ D307a4-307b2/ C314a4-314b2:

gtan tshigs gang gi phyir don gsum po ^[D307a5] nmams ^(mams PNDC; mams G) bsdu pa ^[N352a2] dang so so ba ^(so so ba PNDC; sau ba G) yang ^[P350b6] srid la/ des sangs rgyas de bzhin du zhes bya ba yin ^[C314a5] te/ gtan tshigs des na shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i gzhung ^(pha rol tu phyin pa'i gzhung GPDC; pha rol tu byin pa'i gzhung N) 'dir byis pa nmams kyiis ^(kyis GPN; kyi DC) don gyi ngo bor ^[G433b1] lhag par zhen par byas ^[P350b7] pa'i brtags pa la/ shes par ^[N352a3] bva zhing rtogs par bya'o// de dag ^(de dag DC; de GPN) gang zhe na/ ^[D307a6] gsal bar te bkag par rtogs par bya'o// rjod par byed pa gang gis she na/ des ^[C314a6] na brjod pa ^[P350b8] ni sangs rgyas de bzhin du bvang chub ma thob par brjod pa ste/ ji ltar ^[G433b2] gnas pa'i don nmams ^[N352a4] rtogs pa'i phyir sangs rgyas so// ^(sangs rgyas so// PNDC; sangs rgyas so// G) bvang chub kyang nyon mongs pa dang shes bya'i sgrib ^[P351a1] pa dang bral ba'i ^[D307a7] mtshan nyid do ^(mtshan nyid do GPDC; mtshan nyid do/ N) zhes smos pas ni byang chub sems dpa' dang nyan thos zhes bya ba de ^[C314a7] lta bu la sogs pa gzung ngo// ^(gzung ngo// PNDC; gzungo// G) des na 'di ^(di DC; 'di na GPN) yod pa ^[G433b3/ N352a5] gang dag ^(gang dag DC; gang GPN) yin pa'i rjod ^[P351a2] par byed pa ^(rjod par byed pa DC; brjod par byed pa GPN) de dag gis ni de las bzlog pa'i phung po la sogs pa'i rang bzhin du btags pa'i ^(btags pa'i DC; btags pa GPN) gang dag yin pa sangs rgyas la ^[D307b1] sogs pa de dag la de ltar brjod pa yin no// ^(yin no// PDC; yino// GN) gang nas mtshams bcad ^[P351a3] pas ^[N352a6/ C314b1] she na/ brjod pa ni yongs ^[G433b4] su rdzogs pa'i bar gvis zhes bya ba ste/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i gzhung yongs su rdzogs pa'i bar ^(yongs su rdzogs pa'i bar PDC; yongsu rdzogs pa'i bar GN) ji snyed pas so// ^(ji snyed pas so// PNDC; ji snyed pas so// G) sangs rgyas de bzhin du bvang chub ^[P351a4] ces bya ba la ^[D307b2] sogs pa'i gzhung 'dis ^(sogs pa'i gzhung 'dis DC; sogs pa 'dis GPN) ni ^[N352a7] dngos po'i nram par rtog pa bsal bar shes par ^[C314b2] bva o// ^(dngos po'i nram par rtog pa bsal bar shes par bya'o// DC; dngos po'i nram par rtags par shes par bya'o// GP; dngos po'i nram par brtags par shes par bya'o// N)

³³ Cf. ASBh 137, 23-138, 2: bodhisattvaṃ na samanupaśyati, bodhisattvanāma na samanupaśyati, prajñāpāramitāṃ na samanupaśyati, bodhiṃ na samanupaśyati, caratīti na samanupaśyati, na caratīti na samanupaśyati ([その菩薩は、] 菩薩を観察せず、菩薩という名称 (nāman-) を観察せず、完成した智慧 (prajñāpāramitā-) を観察せず、覚り (bodhi-) を観察せず、[智慧の完成のための修行において実践すべきことを] 実践しているということを観察せず、[智慧の完成のための修行において実践すべきことを] 実践していないということを観察しない) ./ ŚSPRp 118, 10-15/ PVSPRpS 37, 17-20.

何となれば (gtan tshigs gang gi phyir, *yasya hetoh)、[誤って構想されているもの・他に依存しているもの・完成したものという] 三つ [の存在] の内容は、一纏めに [説かれること] もあれば、別々に [説かれること] もあるので、「このことから、私は、同様に、仏陀も【見ず】」と言われるのである。 この理由から (gtan tshigs des na, *tēna hetunā/ *tasya hetoh)、「ここにおいては」 (‘dir, *iha) [すなわち、] 『般若波羅蜜多 [経]』の本文 (gzhung, *grantha-) においては、愚者たちによって対象の本体として執著されているものである「【誤って】 構想【されているもの】 が知られるべきである」 (brtags pa la/ shes par bya, *jñeyā kalpānām) [すなわち、] 理解されるべきである。 そ [の誤って構想されているもの] について何が [理解されるべきであるというの] か、と [問うので] 曰く——「【誤って構想されているものが】 否定される【ということ】」 (bsal ba, *nirākṛti-) が、[すなわち、] 斥けられる【ということ】 (bkag pa, *niṣedha-) が理解されるべきである。 どのような「説く方々によって」 (rjod par byed pa gis, *vācakaiḥ) [誤って構想されているものが否定されるの] か、と [問うので、] このゆえに、曰く——「【私は、同様に、仏陀をも【見ず】 覚りをも見ない、と説く方々によって】」 (sangs rgyas de bzhin du byang chub ma thob par brjod pa, *buddhaṃ tathā bodhiṃ na paśyāmīti vācakaiḥ) [と。] 〔このように説く方々は、〕 あるがままの対象 (ji ltar gnas pa’i don, 如所應安立句義, *yathāsthithāṛtha-) を覚知しているがゆえに、[ここにおける「説く方々」とは、] 仏陀 (sangs rgyas, *buddha-) である。 また、[ここにおける]「覚り」 (byang chub, 菩提, *bodhi-) は、煩惱 [という覆い隠すもの] (nyon mongs pa, *kleśa-, 煩惱 [障]) と知られるべきものを覆い隠すもの (shes bya’i sgrib pa, *jñeyāvaraṇa-, 所知障) を離れていることを特徴 (mtshan nyid, *lakṣana-) とするとと言われるがゆえに、[ここにおいては、仏陀のみならず、] 菩薩 (byang chub sems dpa’, 菩薩, *bodhisattva-) や声聞 (nyan thos, 聲聞, *śrāvaka-) とされるような者など [も見ないということ] が説かれているのである。 よって、どなたであれ、[このように「仏陀などを見ない」と] 説く方々 (A) は、こ [の完成した智慧] (B) としては存在しているのであるが、何であれ、[愚者などによって] 仏陀など [として執著されているもの] (C) が、そ [の存在する完成した智慧] (B) とは正反対の、[五] 蘊などを本体として [誤って] 構想されているもの である場合、その方々 (A) は、そ [の誤って構想されている仏陀など] (C) のことを、そのように「【私は見ない】と」お説きになるのである。 どこに到るまで (gang nas mtshams bcad pas, *kasyāvadheḥ/ *kasyāvadhi/ *kimavadhika-) [そのように説かれるの] か、と [問うので、] 曰く——「【終わりに到るまで】」 (yongs su rdzogs pa’i bar gyis, 至了畢, *ā samāpteh) と。 [すなわち、] 『般若波羅蜜多 [経]』の本文の【終わりに】まで (yongs su rdzogs pa’i bar ji snyed pas, *yāvatsamāptim) [という意味である。] 〔つまり、〕「【私は、同様に、仏陀

も「見ず、」 覚りも「見ない」 (sangs rgyas de bzhin du byang chub, *buddhaṃ tathā bodhim) 云々という、この言葉によって、[存在しないものを] 存在するとする [誤った] 構想 (dngos po'i rnam par rtog pa, *bhāvaikalpa-) が否定されていると知られるべきなのである。【T25, 907c21-908a10】

以上のようにして、有相分別散乱(有体分別)の解説が終了し、次に、「俱相分別散乱」(増益分別)の解説([3])と「毀謗分別散乱」(損減分別)の解説([4-1])がはじまる。そして、やがて、知る人ぞ知る「如来蔵」([4-2])の教えが開陳されるが、これ以下の和訳については別稿を期す。

略号

- AAĀPrPvy *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitavyākhyā*- (Haribhadra-).
 "Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitavyākhyā: the work of Haribhadra together with the text commented on," ed. Unrai WOGIHARA, Tokyo : Sankibo Buddhist Book Store, 1973.
- ASPrPS *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*-.
 Qv. AAĀPrPvy.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya*- (Sthiramati-).
 "Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam," ed. Nathmal TĀṬIA, Patna : K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
- C *Co ne bstan 'gyur*.
- D デルゲ版西藏大蔵經。
 高野山大学附属図書館監修『デルゲ版西藏大蔵經 DVD-ROM 版』大阪：小林写真工業株式会社。
- G *dGa' ldan gser bris bstan 'gyur (dGa' ldan Golden Manuscript bsTan 'gyur)*.
- ĪPK *Īśvarapratyabhijñākārikā*- (Utpaladeva-).
 Qv. ĪPV.
- ĪPV *Īśvarapratyabhijñāvr̥tti*- (Utpaladeva-).
 "Īśvarapratyabhijñākārikā of Utpaladeva with the Author's Vr̥tti: Critical Edition and Annotated Translation," TORELLA, Raffaele, Delhi : Motilal Banarasidass, 2002.
- MAVBh *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*- (Vasubandhu-).
 "Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A buddhist philosophical treatise edited for the first time from a sanskrit manuscript," ed. Gajin M. Nagao, Tokya : Suzuki Research Foundation, 1964.
- MSAvy *Mahāyānasūtrālaṃkāravākhyā*- (Vasubandhu-).
 "Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra: exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra," éd. Sylvain LÉVI, Paris : H. Champion, 1907-1911.
- MSBh *Mahāyānaśaṃgrahabhāṣya*-, Tibetan translation: Theg pa chen po bsdu pa'i 'grel pa (Vasubandhu-).

- Qv. P Li No. 5551/ D Ri No. 4050.
- N *sNar thang bstan 'gyur*.
- P 北京版西藏大藏經。
 "Tibetan Tripitaka, Peking edition," Tokyo : Tibetan Tripitaka Research Institute, 1955-58.
- PrPPS *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha-* (Dignāga-).
Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, ed. Erich FRAUWALLNER, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.
- PrPPSV *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahavivaraṇa-*, Tibetan translation: 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin ma bsdus pa'i tshig le'ur bya pa'i nram par 'grel pa (Triratnadāsa-).
 Qv. G sher phyin Pha/ P sher phyin Pha No. 5208/ N sher phyin Pha No. 3981/ D sher phyin Pha No. 3810/ C sher phyin Pha.
- PS (V) *Pramāṇasamuccaya-* (chapter V) (Dignāga-).
 Qv. PSV (V).
- PSV (V) *Pramāṇasamuccayavṛtti-* (chapter V) (Dignāga-).
 Ole Holte PIND, "Dignāga's Philosophy of Language, Dignāga on anyāpoha: Pramāṇasamuccaya V, Texts, Translation, and Annotation," a dissertation submitted to Universität Wien, 2009. (http://othes.univie.ac.at/8283/1/2009-12-03_0507516.pdf).
- PV *Pramāṇavārttika-* (Dharmakīrti-).
 Qv. PVV.
- PVV *Pramāṇavārttikavṛtti-* (Manorathanandin-).
Dharmakīrti's Pramāṇavārttika with a commentary by Manorathanandin, ed. Rāhula SAṆKṚTYĀYANA, "The Journal of the Bihar and Orissa Research Society," Patna : The Bihar and Orissa Research Society, 1938-1940.
- PVSPPr *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā-*.
 "The Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā," ed. Nalinaksha DUTT, London : Luzac, 1934.
- ŚSPPr *Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā*.
 "Çatasāhasrikā prajñāpāramitā: A theological and philosophical discourse of buddha

- with his disciples," part 1, fas. 1, ed. Pratāpacandra GHOṢA, Culcutta : The Asiatic Society, 1902.
- T 大正新脩大藏經。
高楠順次郎編輯『大正新脩大藏經』東京：大正一切經刊行会、1924-1934。
- 大竹 晋 [2009] 『新国訳大藏經 釈経論部 19：能断金剛般若波羅蜜多經論釈 他』東京：大蔵出版。
- 川尻 洋平 [2016] 「シヴァ教再認識派における *pratibhā* について」『印度学仏教学研究』65-1、p. 276-p. 271、東京：印度学仏教学会。
- 戸田 裕久 [2007] 「明知 (*vidyā*) と閃き (*pratibhā*)：中世ヒンドゥー教哲学における一切智」『日本仏教学会年報』73、p. 55-p. 69、京都：日本仏教学会西部事務所。
- 飛田 康裕 [2017] 「『般若心経』の秘められた意図：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 61 号、p. (1)-p. (40)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2018] 「『般若心経』の秘められた真実：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 62 号、p. (9)-p. (66)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2019] 「円成実性を基軸とする三性説の特徴と思想上の意義について：三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』における三性説」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 63 号、p. (9)-p. (44)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2020] 「三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論』の和訳：十種分別散乱総説、無相分別散乱、および、有相分別散乱」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 64 号、p. (41)-p. (78)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2022] 「三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論』の和訳：三性説総説、遍計所執性、依他起性、および、円成実性」『早稲田大学高等学院研究年誌』第 66 号、p. (45)-p. (76)、東京：早稲田大学高等学院。
- 服部 正明 [1961] 「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第 9 巻、p. 119-p. 136、大阪：大阪府立大学。
- 服部 正明 [1980] *Apoha and Pratibhā*, "Sanskrit and Indian Studies: essays in honour of Daniel H. H. Ingalls," eds. M. Nagatomi, B. K. Matilal, J. M. Masson, and E. Dimoch, p. 61-p. 73, London : D. Reidel Publishing Company.

Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahavivarāṇa- チベット語訳校訂テキスト
 ——三性説総論、遍計所執性、依他起性、および、円成実性——

凡例

- C *Co ne bstan 'gyur.*
- D デルゲ版西藏大蔵経。
 高野山大学附属図書館監修『デルゲ版西藏大蔵経 DVD-ROM 版』大阪：小林写真工業株式会社。
- G *dGa' ldan gser bris bstan 'gyur (dGa' ldan Golden Manuscript bsTan 'gyur).*
- N *sNar thang bstan 'gyur.*
- P 北京版西藏大蔵経。
 "Tibetan Tripitaka, Peking edition," Tokyo : Tibetan Tripitaka Research Institute, 1955-58.
- PrPPS *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha- (Dignāga-).*
Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, ed. Erich FRAUWALLNER, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.

[2-2] 三性説

[2-2-0] 三性説総論 (*ad.* PrPPS v. 27)

PrPPSV G430a3-6/ P347b8-348a4/ N349a4-7/ D304b6-305a2/ C311b6-312a2:

don 'di nyid ji ltar rnyed ^[P348a1/ D304b7] ce na/ ^(ce na/ GPDC; ca na/ N) shes rab pha rol phyin par ^{(shes rab pha rol phyin par}
^{DC; shes rab kyi pha rol tu phyin par GPN)} ni/ ^(ni/ DC; ni GPN) zhes bya ba la sogs pa brjod do// ^(brjod do// PNDC; brjodo// G) ^[G430a4]
shes ^[C311b7] rab pha rol phyin ^(shes rab pha rol phyin DC; shes rab kyi pha rol tu phyin GPN) zhes ^[N349a5] bya ba la/ shes rab kyi
 pha rol tu phyin pa ni nram pa gnyis te/ gtso bo dang ^[P348a2] phal pa'o// de la gtso bo ni nyon mongs pa dang/
^(dang/ DC; dang GPN) shes bya'i sgrib pas dben pa'o// phal pa ^[D305a1] ni bris pa'i yi ge dang ming la sogs ^[G430a5] pa
 bstan pa'i rang bzhin no// ^(rang bzhin no// DC; rang bzhin no/ P; rang bzhino// G; rang bzhino N) ^[N349a6] de la bstan ^[C312a1] pa'i rang
 bzhin gyi shes rab kyi pha rol ^[P348a3] tu phyin pa 'dir ro// ^('dir ro// PNDC; 'diro// G) bstan pa zhes bya ba ni chos
 bstan pa sgra dang don gyi ngo bor byas pa'o// ni'i sgra ni gang gi phyir gyi don to// ji ltar byas pa zhe na/
^(zhe na/ GPN; zhes DC) brjod ^[D305a2] pa ni gsum ^[G430a6] la yang ^[N349a7] dag brten zhes bya ba ^(zhes bya ba DC; ces bya ba GPN)
 ni gsum ^[P348a4] po la brten par byas pa'o// ^(byas pa'o// GPN; bya'o// DC) ^[C312a2] gsum po de gang zhe na/ brjod pa ni/
^(ni/ DC; ni GPN) brtags pa dang ni gzhan dbang dang// ^(dang// DC; dang/ GPN) yongs su grub pa ^{(yongs su grub pa DC; yongs su}
^{sgrub pa zhes P; yongsu sgrub pa zhes G; yongs su bsgrub pa zhes N)} kho na'o// ^(kho na'o// GDC; kho na'o PN) zhes bya ba'o//

(122)

PrPPSV G430a6f./ P348a4f./ N349a7f./ D305a2f./ C312a2f.:

de la **brtags pa** zhes bya ba ni sngon po la ^[G430b1/ N349b1] sogs pa ^[P348a5] gang zhig yongs su ma dag pa'i (yong su ma dag pa'i PNDC; yongsu ma dag pa'i G) ^[D305a3] shes pa la gzung ba dang 'dzin pa tha dad par snang ba de la brjod de/ (brjod de/ PNDC; brjode/ G) byis pa ^[C312a3] mams kyis brtags pa'i phyir ro// (phyir ro/ PNDC; phyiro/ G)

PrPPSV G430b1f./ P348a5f./ N349b1f./ D305a3f./ C312a3:

gzhan gvi dbang zhes bya ba ni gang zhig gnyis med pa'i shes ^[P348a6] pa la ^[N349b2] rang gi ngo bor ^[G430b2] rnam par gnas pa na ma rig pa'i dbang gis na gnyis su (gnyis su PDC; gnyisu GN) snang ba ste/ de ni ma rig pa'i gzhan gyi ^[D305a4] dbang yin pa'i phyir na **gzhan gvi dbang** zhes brjod do// (brjod do/ PDC; brjodo/ GN)

PrPPSV G430b2f./ P348a6f./ N349b2f./ D305a4/ C312a4:

^[C312a4] **yongs su grub pa** (yongs su grub pa PND; yongsu grub pa G; yongs sa grub pa C) zhes bya ba ni ^[P348a7] gzung ba dang 'dzin pa'i ('dzin pa'i DC; 'dzin pa GPN) rnam pas dben ^[N349b3] pa'i rtogs ^[G430b3] pa (rtogs pa GP; rtog pa NDC) gang yin pa 'di yin te/ de ni yongs su grub pas na (yongs su grub pas na PNDC; yongsu grub pas na G) **yongs su grub pa** (yongs su grub pa PNDC; yongsu grub pa G) zhes brjod do// (brjod do/ PNDC; brjodo/ G)

[2-2-1] 遍計所執性 (ad. PrPPS v. 28ab)

PrPPSV G430b3-6/ P348a7-348b3/ N349b3-6/ D305a4-7/ C312a4-7:

ji ltar na bstan pa gsum la brten ce na/ sbyor bar byed ^[P348a8/ D305a5] pas brjod pa ni/ **med ces bya la sogs tshig gis//** (tshig gis// D; tshig gis/ PNC; tshigis/ G) ^[C312a5] **brtags pa** ^[N349b4] **thams cad** (thams cad PNDC; thamd G) **'gog pa ste//** (ste// D; ste/ GPNC) zhes bya ^[G430b4] ba la sogs pa'o// **med ces bya ba** ste yod pa ma yin no (yin no PDC; yino GN) zhes bya ba la **sogs pa** de lta bu ^[P348b1] bstan pa'i **tshig gi** (tshig gi DC; tshig gis PN; tshigis G) rnam pa rnam kyis so// (kyis so/ PDC; kyiso/ GN) **sogs pa'i** sgras ni dgag par (dgag par GPN; dgag pa DC) rjod par byed pa (rjod par byed pa PN; brjod par byed pa G; rjod par byed DC) gzhan ^[D305a6] gyis ^[N349b5] kyang byed pa yin no (byed pa yin no P; byed pa yino GN; byed pa ma yin no DC) zhes brjod pa yin no// (zhes brjod pa yin no// DC; // GPN) **brtags** ^[C312a6] **pa thams cad** (thams cad PNDC; thamd G) ^[G430b5] **'gog pa ste//** (ste// D; ste/ C; ste GPN) zhes bya ba la/ (la/ DC; omit. GPN) **thams cad** ces bya ba (thams cad ces bya ba DC; omit. GPN) ni ma lus pa'o// **brtags pa** ^[P348b2] zhes bya ba ni rtog pa'i (rtog pa'i DC; rtog pas GPN) bzos sbyor ba'o// (sbyor ba'o/ GPDC; sbyar ba'o/ N) **'gog pa** ste zhes bya ba ni sel bar byed pa'o// gzhung 'dis ('dis GPND; 'di C) ni 'di skad ces bya ba ^[D305a7] ni ^[N349b6] 'dir dgag pa'i tshig thos pa gang yin pa de dag ^[G430b6] gis ni brtags ^[C312a7] pa'i dngos po mtha' ^[P348b3] dag (brtags pa'i dngos po mtha' dag GPDC; brtag pa'i dngos po mtha' dag N) 'gog par byed par khong du chud par bya'o (khong du chud par bya'o GPDC; khong

du chud par bya'o/ N) zhes bya ba 'di bstan pa yin no// (yin no// GPDC; yino// N)

[2-2-2] 依他起性 (*ad.* PrPPS v. 28cd)

PrPPSV G430b6-431a3/ P348b3-6/ N349b6-350a2/ D305a7-305b3/ C312a7-312b2:

de bzhin du/ (du/ DC; du GPN) sgvu ma la sogs dpe (dpe DC; de GPN) rnams kyis// (kyis// GPND; kyis/ C) gzhan gvi dbang
 [N349b7] ni yang dag bstan// zhes bya ba (bstan// zhes bya ba D; bstan/ zhes bya ba C; bstan ces bya ba GPN) la sgvu ma ni mig [G431a1/
 D305b1] 'phrul la sogs pa gzhan (gzhan DC; omit. GPN) slu bar [P348b4] byed pa'i bdag nyid can te/ (byed pa'i bdag nyid can te/ DC;
 byed pa'i bdag nyid can te/ dpe zhes bya ba nye bar 'jal bar byed pa'i bdag nyid can te/ GPN) dpe zhes [C312b1] bya ba nye bar 'jal bar byed pa
 chos mthun pa de lta bu [N350a1] rnams kyis so// (rnams kyis so// PNDC; mamso kyiso// G) sogs pa'i sgras [G431a2] ni dri za'i
 grong khyer [P348b5] la sogs pa'o// dpe de rnams nyid kyis (dpe de rnams nyid kyis DC; dpe de rnams nyid GPN) yin pa des na/
sgvu ma la sogs (sogs GPN; sogs pa DC) dpe rnams [D305b2] kyis (dpe rnams kyis GPN; dpe rnams nyid kyis DC) gsungs pa (gsungs pa DC;
 gang du GPN) yang dag bstan pa (yang dag bstan pa GPN; yang dag par bstan pa D) thos pa de ni gzhan gvi dbang yin par [N350a2/
 C312b2] rtogs par bya'o// 'di skad du gang du sgyu ma la [G431a3] sogs [P348b6] pa dper byas nas bcom ldan 'das
 kyis (kyis PNDC; kyi G) dngos bstan par mdzad pa (dngos bstan par mdzad pa DC; bstan pa mdzad pa GPN) der ni gzhan gyi dbang gi
 ngo bor (ngo bor PNDC; ngaur G) brjod par nges par bya'o (brjod par nges par bya'o GPD; brjod par nges par bya'o/ N; bjad par nges par bya'a/ C)
 zhes (zhes GPND; zhas C) brjod pa yin [D305b3] no// (yin no// PD; yino// GN)

[2-2-3] 円成実性 (*ad.* PrPPS v. 29ab)

PrPPSV G431a3-5/ P348b6-349a1/ N350a2-5/ D305b3-5/ C312b2-4:

yongs su grub pa'i rang bzhin (yongs su grub pa'i rang bzhin PNDC; yongsu grub pa'i rang bzhin G) bstan pa [N350a3] ji ltar mdzad ce
 na/ ston [P348b7] par mdzad pas [G431a4] brjod pa [C312b3] ni// (ni// GPND; ni/ C) rnam par byang ba bzhi vis ni//
yongs su grub par (yongs su grub par PNDC; yongsu grub par G) rab tu bsgrags// (rab tu bsgrags/ NDC; rab tu bsgrags/ GP) zhes bya ba'o//
yongs su grub pa'i ngo bo nvid (yongs su grub pa'i ngo bo nyid PNDC; yongsu grub pa'i ngo bo nyid G) rab tu bsgrags shing bshad
 par mdzad pa [D305b4] yin no// (yin no// PDC; yino// G; yino/ N) [P348b8/ N350a4] ji ltar zhe na/ rnam par byang ba bzhi
vis ni'o// bzhi [G431a5] zhes bya ba ni rnam pa bzhi'o// rnam par byang ba zhes bya ba ni rnam [C312b4] par
 dag pa'o// rnam par byang bar byed pas na rnam par byang ba ste rnam pa'o// [P349a1] rnam par byang ba
 yang yin [N350a5] la bzhi yang yin pas rnam par byang ba [D305b5] bzhi'o// (bzhi'o// DC; bzhi'i GPN)

PrPPSV G431a6/ P349a1f./ N350a5/ D305b5/ C312b4f.:

(124)

[G431a6] 'di lta ste/ [1] rang bzhin gyis rnam par byang ba dang/ [2] dri ma med pa'i rnam par byang ba dang/ [3] dmigs pa'i [P349a2] rnam par byang ba dang/ (dmigs pa'i rnam par byang ba dang/ GPDC; dmiḍ pa'i rnam par byang ba dang/ N) [4] [C312b5] rgyu mthun pa'i rnam par byang ba'o//

PrPPSV G431a6-431b2/ P349a2-4/ N350a5-7/ D305b5-7/ C312b5f.:

de la [1] rang bzhin gyis rnam par byang ba brjod pa thams cad (thams chad PNDC; thamd G) [N350a6] kyi yang [G431b1] lhag mar gyur pas (lhag mar gyur pas DC; lhag mar gyur pa GPN) ni gnyis med pa'i [D305b6] rtogs pa (gnyis med pa'i rtogs pa GPN; gnyis med pa'i rtog pa DC) ste/ rang bzhin te rang gi ngo bo bcos bu [P349a3] ma yin pa bdag nyid kyi rang bzhin kho nas de'i bdag nyid yin pa'i phyir nor bu rin po che [C312b6] bzhin no// (bzhin no/ PNDC; bzhino/ G) gang la dgongs nas (dgongs nas GPDC; dgangs nas N) bcom ldan 'das (bcom ldan 'das PNDC; bcomdas G) [N350a7] kyis sems can (sems can PNDC; semn G) thams cad (thams cad PNDC; thamd G) [G431b2] de bzhin gshegs pa'i snying po can/ chos [P349a4] thams cad kyang de bzhin [D305b7] gshegs pa dang 'dra ba ste/ ngo bo nyid (ngo bo nyid PNDC; ngau nyid G) med pa zhes bya ba (med pa zhes bya ba DC; med pa GPN) la sogs pa gsungs pa'o// (sogs pa gsungs pa'o/ GNDC; sogs pa'o/ P)

PrPPSV G431b2-4/ P349a4-6/ N350a7-350b2/ D305b7-306a1/ C312b6-313a1:

[2] dri ma med pa'i rnam par byang ba yang [C312b7] brjod pa gnyen po'i [N350b1] lam ni bsgom pa'i stobs [G431b3] kyis rnal 'byor ba rnam la gnyis [P349a5] med pa'i shes pa skyes pa gang yin pa de ni dri ma med pa'i rnam par byang [D306a1] ba ste/ dri ma med pa ste (ste GPD; sta NC) dri ma dang bral ba nyid (bral ba nyid NDC; 'bral ba nyid GP) kyis rnam par byang zhing rnam par dag pa zhes bya ba'i tshul [G431b4/ N350b2] gyis so// (gyis so/ PNDC; gyiso G) gang la dgongs [C313a1] nas [P349a6] bcom ldan 'das (bcom ldan 'das PNDC; bcomdas G) kyis yang dag pa'i mtha' dang de bzhin nyid dang chos kyi dbyings zhes bya ba la sogs pa gsungs pa'o// (sogs pa gsungs pa'o DC; sogs pa'o GPN)

PrPPSV G431b4f./ P349a6f./ N350b2f./ D306a1-3/ C313a1f.:

[3] dmigs [D306a2] pa'i rnam par byang ba'i (rnam par byang ba'i PNDC; rnam byang ba'i G) don brjod pa ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don (pha rol tu phyin pa'i don DC; pha rol tu phyin pa GPN) thams [N350b3] cad (thams cad PNDC; thamd G) de/ de [P349a7] ni gang gi phyir [G431b5] dmigs par bya zhing [C313a2] yul du byed pa des na dmigs pa yin no// (yin no/ PDC; yino/ GN) de nyid ni rnam par byang ba yin zhing rnam par dag pa yin te/ de thob par byed pa'am de la dmigs par byed [D306a3] pa'i phyir ro// (phyir ro/ PNDC; phyiro/ G)

PrPPSV G431b5f./ P349a8f./ N350b3-5/ D306a3f./ C313a2f.:

[4] [P349a8] rgyu mthun pa'i rnam [N350b4] par byang ba brjod [G431b6] pa shin tu rnam par dag pa'i chos kyi dbyings kyi rgyu mthun pa bstan pa'i [C313a3] chos su (chos su PNDC; chosu G) snang ba ste/ de'i rgyu mthun pa'i phyir dang/

de nyid kyi phyir rnam par byang ba yin zhing yongs su dag ^[P349b1] pa (yongs su dag pa PNDC; yongsu dag pa G) yin te/ (yin
te/ DC; ste/ GPN) 'dra ba'i 'bras bu ni rgyu mthun ^[N350b5] pa zhes ^[D306a4] bya'o//

PrPPSV G431b6f./ P349b1f./ N350b5/ D306a4/ C313a3f.:

des na ^[G432a1] rnam par byang ba rnam pa bzhi po 'dis shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dir yongs su grub par
(yongs su grub par PNDC; yongsu grub par G) bstan par mdzad ^[C313a4] pa yin no (yin no PDC; yino G; yino// N) zhes bya ba ni ngag gi
don ^[P349b2] to//

小稿は、早稲田大学特定課題研究助成費（2022C-277）の成果の一部である。

